九州産業大学国際文化学部紀要　第34号　79－134（2006）

現代アイルランド劇作家研究(6)―マリーナ・カー

河　野　賢　司

現在進行形で活躍中の劇作家について論じるのは愚挙である。新しい作品が発表されるや新しい論評が次々に書かれ，新しい伝記資料が追加あるいは発掘され，系統だったまとめはたちまち破綻をきたし，何を書いてもその時点での暫定的なものにならざるを得ないからである。マリーナ・カーは2004年6月ごろ第3子（初の女児）の出産以後，執筆活動を一時中断，目下のところ育児に専念[1]していると知り，この端境期をうまく利用して，テキストの入手できる6作品（うち2作品は本紀要で既発表）について概観し，マリーナ・カー論として紹介しておこうと拙稿を書き上げた。ところが，その矢先に，やはりというべきか，彼女の最新作が発表され，この6月から上演されている。従って，最新作の紹介は次稿に委ねたい。

なお，カーの経歴に関しては既発表の記述と重複するのを避けるため割愛するが，父親ヒュー（Hugh Carr）が地元では知られた劇作家・小説家，母親は母語のアイルランド語で未発表ながら詩を書いていたという文学的背景が家庭にあったこと，1987年の大学卒業後渡米し，1年間ブルックリンの小学校（St. Anselm school in Bay Ridge, Brooklyn）で1年生を教えていたこと[2]，日本芸術院に相当するアイルランドの「イースダーナ」（Aosdána[3]）会員であることを付記するにとどめる。

(I)　マリーナ・カーの戯曲の梗概と論評

次頁の表は初演の発表順に11作品をまとめたものである。ほぼ2年に1作の着実なペースで執筆がなされてきたことが分かる。なお，＊を施した4作品はテキストが現時点では未刊行であり，詳しい内容等はここでは扱うことができない。

マリーナ・カー演劇作品一覧

	標題（邦訳）	原題	初演年月日	初演劇場
①	『暗闇に低く』	*Low in the Dark*	1989.10.24	Project Arts Centre, Dublin
②＊	『鹿の降伏』	*The Deer's Surrender*	1990. n.d.	Andrews Lane Theatre, Dublin
③＊	『この愛という代物』	*This Love Thing*	1991. 2.12	Old Museum Arts Centre, Belfast
④＊	『ウラルー（哀歌）』	*Ullaloo*	1991. 3.25	Peacock Theatre, Dublin
⑤	『ザ・マイ』	*The Mai*	1994.10. 5	Peacock Theatre, Dublin
⑥	『ポーシャ・コフラン』	*Portia Coughlan*	1996. 3 .27	Peacock Theatre, Dublin
⑦	『猫ヶ沼のほとりで』	*By the Bog of Cats...*	1998.10. 7	Abbey Theatre, Dublin
⑧	『ラフタリーの丘で』	*On Raftery's Hill*	2000. 5. 9	Town Hall Theatre, Galway
⑨	『エアリアル』	*Ariel*	2002.10. 2	Abbey Theatre, Dublin
⑩＊	『お肉にお塩』	*Meat and Salt*	2003. 1.22	Peacock Theatre, Dublin
⑪	『女と案山子』	*Woman and Scarecrow*	2006. 6.16	Jerwood Theatre Upstairs, London

①『暗闇に低く』（*Low in the Dark*）２幕（全16場）

初演はテンプル・バー地区にあるプロジェクト・アーツ・センター。1966年に設立され，若者に人気の前衛的な作品がよくかかるこの場所は，当時25歳の新鋭劇作家の登竜門として相応しい場所である。

標題は第１幕最後の「カーテン」の台詞「男と女は，死の宇宙を暗闇のなか，低く歩いている（walking low in the dark），どこにでもいる二人になってしまっていたからである」(59) から採られている。この場合のlowは物理的に「身を屈めて」の意味だろうか，精神的に「しょんぼりと」(low-spiritedly) の意味だろうか。

舞台は上手に奇怪な浴室（バスタブ，トイレ，シャワー，帽子と燕尾服のついたブラシ），下手に男たちの空間（タイヤ，リム，未完成の壁とブロック），舞台の床はクリーム色と黒色のチェック模様。

登場人物は母と娘――50代で魅力的だが老け気味のベンダー（Bender）と20代半ばで甘やかされて気紛れなビンダー[4] (Binder)――，ビンダーの恋人で20代後半のボウン（Bone），その相棒で30代半ばのバクスター[5]（Baxter）の，男女同性ペア２組と，金襴で厚手のカーテンとカーテン・レールで全身を覆い隠し，全幕を通して顔も体も見えない，年齢不問の女性「カーテン」(Curtains) の５人である。なお，バクスターはカーテンの恋人。

第１幕　第１場　舞台中央でカーテンが物語を始める。北部出身の男に会いたいと夢見る南部出身の女と，南部出身の女との出会いを望む北部の男の話。便座に座っていた娘ビンダーから，カーテンを開けろ，と怒鳴られて退場。母親ベンダーは浴槽の中。母娘はともに口紅を塗ったあと，ベンダーが悲鳴もあげずに男の赤ん坊を出産。酒と煙草で一服する。しかし，ビンダーはその赤ん坊は女の子で，生んだのは自分だ，と反論す

る。ベンダーはこの子の父親に出産を知らせる手紙を書こうとする。

カーテンが戻る。物語の続きを語ろうとするが，母娘の失礼な応対に再び立ち去る。ベンダーは娘に手紙文を口述筆記させる。しかし，住所も書かず，音楽家と思しきその父親が戻れば自分宛てと気づくだろうから，と手紙は床に置かれるのみ。絶対に彼は現れないし，母親のような人間になりたくない，とビンダーは反発，口論になる。このとき，再び陣痛がベンダーを襲い，彼女は「麻酔！」と叫ぶ。ビンダーは助産士のように声をかけ，生まれた男児を抱いて退場。また息子が生まれた，とベンダーも浴槽から出て，退場。

第2場　バクスターとボウンが夫婦然として登場。バクスターはハイ・ヒール，ネックレスなど女装しており，妊婦のような外見。壁造りに励むボウンを，編物をしながらバクスターは褒める(編んでいるのは6mのスカーフ)。女の声色のバクスターがときおり地声になり，ボウンがプロンプトすることから，二人は<演技>をしていることがわかる。台詞を忘れたことを怒られたバクスターは，女装を脱いで着替える。ボウンはある女性を好きになり，彼女が置き忘れたイアリングとピンクの靴下を取り出す。彼は洗濯してアイロンがけもしていた。バクスターはその靴下を無理にボウンから借りて自ら試着する。

汚れたと言ってボウンが脱がすと，この足を喜んだ時もあった，と皮肉る（同性愛関係の暗示)。その女性は，ボウンによれば「両腕に長いブロンドの体毛，頭には長い黒髪，ぎっしり詰まったハンドバッグ」を持ち，小刻みな歩幅で小首をかしげた歩き方をするのだそうで，実演してみせ，それをバクスターが真似をする。「ネックレス」と渾名した女性は，前でブラを結び，回してから腕を通す癖があった，とバクスターは思い出し，ブラには様々な種類がある，と並べ立てる。しかし，弱点を示すものだから，とカーテンは下着をつけない，とバクスター。

カーテン，続いてベンダー，ビンダー母娘登場。3人は互いに早口で紹介しあうが，非論理的な対応になる。カーテンが始めたある男の物語をボウン，ベンダー，ビンダーが<渡り台詞>風に受け継いで続けていく。——男が自転車で世界中（海上も含めて）を移動中に，道路上に女を発見，はねて停止した。男は自転車を降りて女と歩き出す。女は「アホウドリを殺し，黄金のロバと添い寝せねばならない」と語る。——この台詞とともにカーテン，退場。バクスターも後を追う。ベンダーも浴槽へ向かう。

忘れ物をする女は嫌いだと，ボウンは靴下とイアリングをビンダーに投げるが，靴下は取り返し，ビンダーにキスして退場。ビンダーも浴室へ行く。ベンダーは娘の（ボウンとの）交際に不満で口喧嘩となり，なら私を中絶すればよかったのに，とビンダーは挑発する。赤ん坊の泣き声。授乳を促すと，すでに済ませた，とビンダー。(赤ん坊の中には不敬にも「ポウプ」（ローマ教皇）と名付けられた者もいる。)

カーテンが再登場。新しいスリップを買った，と報告するカーテンに，二人は矢継ぎ早の質問（色，サイズ，価格，その他)を浴びせる。スリップとは，インディアン風の玉すだれで，ベンダーは自分もチパッチという名のインディアンからプレゼントして貰ったが，別れる時に突っ返した，と語る。浴槽にカーテンを招き入れ，泡風呂にして，うぶ毛剃りの話題と並行して，再び物語の続きが始まる。——女は男にいままで何人の恋人がいたか，と尋ね，男は「ひとり，とその他もろもろ」と返事する。「その他もろもろの登場は早すぎか，遅すぎ」と謎めいた受答えを女はする。——カーテン，退場。

ベンダーはビンダーに帽子と燕尾服をつけさせる。(すでに何度も繰り返されたらしいこの寸劇では，ビンダーは母親の昔の恋人役を演じているようだ。) 湖面に映る月影を見ながら木立を散歩する場面。フィン[6] (Fionn MacCumhail) が狩りをした山，パラス (Pallas Athene) が泳いだ故事にちなむパラス湖[7] (Pallas Lake) などの薀蓄を元カレ (元亭主？) が傾け，ベンダーの無知に呆れる台詞は，交際初期にはなかった，と抗議するベンダー。次の場面は元カレの実家付近にある聖ブリギッドの泉 (St Brigid's Well) や妖精の砦。愛している，という言葉は，ベンダー以外の者に何百回も言ったし，今後も何百万回も言う，本気でなくても言うし，森で叫んだり，葬儀で囁いたりして，と元カレ役のビンダー。演技を終えて，母娘，退場。

第3場 デッキ・チェアにすわって編物をするボウン。ネックレスをつけ，マニキュア液を持ってバクスター。バクスターは役柄を交代したがるが，ボウンは乗り気でない。しかし，結局は提案に応じて，女役を引き受け，ペディキュアを始める。帰宅した夫 (もしくは恋人) の帰りを待つ妻役で，8時に外出予定だから急いで食事の準備をするわ，と応えるが，バクスターはこの台詞が気に入らず怒り出すので，ボウンは演技をやめかける。しまいには，バクスターの方が台詞を忘れてしまい，攻守逆転。ボウンはバクスターにピンクの靴下を渡し，「ピンク・ソック」(すなわち，ビンダー) 役をさせる。別れ話を持ち出しながらも彼女の愛情を信じるボウンに，ビンダー役のバクスターが素っ気ない対応を示し，「合法的に憎みあう」ために結婚したい，と口走るので，ボウンは演技を打ち切る。

カーテンとベンダー，ビンダーが登場。母娘は物語をせがむが，バクスターは昨晩聞いたから，と退場。カーテンの物語。——男と女は，別の女が溝のなかで「サラマンカで娘とはぐれ，カルタゴで息子を殺され，デリーで恋人を亡くし，この溝で気が変になった」と歌っているのに出会う。なにか出来ることは，と尋ねても返事もしないので，男女はこの女を殴って，歩き続けた，という話。——カーテン，ベンダー退場。

第4場 6mのスカーフを首に巻いたボウンの後を，そのスカーフを編みながらビンダーが歩く。ロール・パンを3個，ビンダーから貰い，一口かじらせ，キスをする。以後，二人はそれぞれ勝手に自分の話を続ける。ビンダーは男も妊娠すれば面白いのに，と妊娠して泣く男の様子を語り，ボウンはおいしいパンを焼く秘訣を講釈する。ビンダーは結婚生活と同棲とは違う，として，風呂付きの家で赤ちゃんがいて，妻の下着を洗濯し，妻の髪を梳かし，他の男がつまらなく見えるような夫との永遠の生活が理想だ，と語るが，ボウンは魅力的な眼差し (眼からレーザー光線を発するような)，編物や料理に没頭するような女性が理想だけれど，3ヶ月先の将来は分からない，と語り，結婚観は擦れ違いのまま，両者退場。

第5場 布団叩きでベンダーがカーテンを3，4回叩いて埃を払う。両者これを楽しんでおり，SMの暗示がある。さらにベンダーの打擲は続き，逃げて倒れたカーテンを叩いたあと，顔を拭いてやる。ビンダー，登場。カーテンによる物語。——3人の女が十字架に掛けられており，酢を欲しがる女，「戻って来る (生き返る？)」と叫ぶ女，男に絹を着せても山羊で，山羊に絹を着せても女だ，と叫ぶ女がいる話。——ベンダーは感動的な話だと褒める。

ビンダーはシャワーに向かい，ベンダーに3人の赤ちゃん (全員ジョナソンという名前) を放り投げ，自分は2人の赤ちゃんと座り，ともに母乳を与える。カーテンも腕一杯に赤ちゃんを抱え，母娘の抱く赤ちゃんと

無作為に交換する（枕投げのように黄色いやピンクの赤ん坊が投げられる）。カーテンは，<女は一杯で生まれ，空っぽで死ぬ，男はその逆に流産しなければ，一杯で死ぬ>，と語り，自転車をなくした物語中の男に女が声をかけるところで退場。ベンダーは「黒羊」「大統領」と名付けた赤ちゃんを放り捨て，ビンダーから「ポウプ（教皇）」と名付けたお気に入りの赤ちゃんを受け取る。ビンダー，退場。ベンダーはポウプに，将来は離婚禁止，進化論否定，ピル撲滅を押し進め，素晴らしい時を過ごす夢を語りかけ，赤ちゃんだらけのシャワー室でシャワー・カーテンを閉める。

第6場　カーテンが登場。呼吸が徐々に荒くなり，前後にゆれ始め，やがて治まる。カーテンの下に隠れていた，上半身裸のバクスターがこの時点で姿を現す（性的暗示が濃厚）。カーテンが物語——片脚が不自由で，首に端綱をつけた男に男女が出会った話——を始めると，ボウンとビンダーが登場。二人が話を引き継いだ後，その障害をもつ男は，女から健常な方の脚を傷つけられたにも関わらず感謝し，男女はやがて恋に落ちた，とカーテンは物語る。シャワーからベンダーも駆けつける。誕生の偶然，道中の無聊，死の究極性ゆえに恋したと男は考え，香水と口紅，乳房の究極性ゆえ，と女は考えた。男女は，雪に閉ざされぬうちに干し草を作ろう（今を楽しもう）と頑張り，ある朝目覚めると収穫は済んでおり（愛は醒めており？），男の軽蔑交じりの声に女は泣き出した，とカーテンが語ると，聞き手たちからは一斉に非難の声。しかし，カーテンの話は続く——男は北部の丘，女は南部の丘の話などをするが，やがて沈黙する。死の宇宙を通って暗闇を低く歩く，どこにでもいる二人の人間になったことを恥じたから。進む理由もなければ，立ち止まる理由もなかった，と。照明暗転。

第2幕　第1場　中央の板付きはカーテン。例の長いスカーフを巻いたビンダーの後をボウンが編物をしながら続く。二人とも妊娠している。いったん，そのまま退場。カーテンの背後からバクスターの声がして，二人は言い争う。ボウンとビンダーが再登場。ボウンはビンダーからハンドバッグを借り，中からタンポンを2個取ってポケットに入れる。ビンダーが咎めると，今度はピルを1錠呑みこみ，彼女が不注意なため自分は妊娠したと怒る。ビンダーの方も一人で良かったのに，双子を妊娠した，と怒る。二人はそれぞれが拵えたロールパンを交換する。カーテンが，男女が喧嘩した物語を始めると，ベンダーが登場して反論。カーテンは無視して続け，男が「いいセックスは無理だな」（I suppose a good ride is out of the question）と言った，と語ると，それまで隠れていたバクスターも，男はそんな言い方はしない，と反論。女がその気でないと答えると，無理やりでもできるが俺はそんなことはしない，と男は言い，優しいのね，と女は眠りに落ちた，と物語は展開し，カーテン退場，ビンダーは浴室へ。ボウンとバクスターも退場。

第2場　ベンダーは浴室で喫煙。ビンダーは浴室の窓から頭を出して戸外の男に声をかける。ベンダーが彼女を押しのけて替わり，男の名前——「麗しき救世主」という意味のサルヴァトーレ・ディ・ベッラ（Salvatore Di Bella）——を聞き出すが，自分の名前を聞かれて困っていると，ビンダーが口を挟み，たえず体を曲げているから「ベンダー」[8]だ，と代返する。男は過ぎ去り，ベンダーはビンダーに帽子を被らせ，時代がかった口調で，避妊するように命令するので，ビンダーは怒って帽子を脱ぐ。ベンダーは帽子の着脱を次第に速度を上

げて繰り返し，着帽時は女性，脱帽時は男性の設定の一人二役で演じる。ビンダーはラブ・ソングの音楽をかけ，帽子を被り（今回は男役だが），先ほどのイタリア男の演技をして，ベンダーとダンスを踊る。宇宙は虚空の空洞にできた癒しがたい傷，広大な耐えがたい哀しみだから，立ち止まって考え込むことはよそう，とビンダー。ダンスと音楽が停止し，両者退場。

第3場 妊娠したお腹がいっそう大きくなったボウンが，ハイ・ヒールと紳士靴を片脚ずつ履いて登場。煉瓦積み1個と編物1針を交互に繰り返す。バクスターが登場し，ボウンのお腹に耳を当て，胎児の鼓動を確かめる。静脈瘤防止のためハイ・ヒールを禁止したのに，とバクスターが叱ると，ボウンは昔は二人で楽しく過ごし，身軽で自由だった，と懐古する。二人とも赤ちゃんが女の子であればいい，と願い，ネックレスや化粧法，歌やダンス，嘘のつき方，幸せなおとぎ話を教えてやろう，と語り合うが，ボウンは男の赤ちゃんでも構わないらしい。

バクスターはポケットから手作りのロール・パンを取り出し，ボウンに薦める。ボウンは気遣いに感動するが，気持ちを表現する適切な言葉が思い浮かばず，バクスターはがっかりする。言葉の代わりに表情で示すから，とボウンはバクスターに少し歩いて振り返らせるが，わざと悲しげな表情を浮かべており，バクスターは気落ちする。ボウンは謝り，再度試みると，今度は満面の笑みを見て，やればできるじゃないか，とバクスターは大喜びする。ボウンは胎児がお腹を蹴った，と言い，バクスターはボウンを医者に見せに連れて行く。

第4場 ベンダーとビンダーが雑誌『ロマンス実話』を読みながら登場。ベンダーが抱擁する男女のラブ・シーン場面（白血病を告白する女性に，かまわず背中を愛撫する男性）を朗読する。カーテンが登場し，物語を始めて邪魔するので，二人は黙らせる。カーテンは，便座に座り，自分の身に付けているカーテンはバーゲン品だとか，手縫いだとか，嘘っぽい話をする。ベンダーとビンダーは便座からカーテンを押しのけ，便器に唾を吐く。カーテンが浴槽に唾を吐くと，ベンダーがトイレに唾を吐く（これが4回繰り返される）。ベンダーは浴槽，カーテンはトイレに戻り，互いに唾を溜めて相撲取りのように対峙し，同時に唾を吐き合う。逃げ出すカーテンをベンダーは浴槽から見送る。この間，ビンダーは新聞の死亡記事欄を読んでいる。

ビンダーの読み上げる97歳女性急逝の死亡記事に対して，ずっと前に死んでいたのを盲聾者の亭主が気づかなかっただけ，あるいは亭主も死んでいるのが発見されていないだけ，とベンダーは悪口を浴びせる。死ぬとすれば他人のために死にたい，と言うビンダーに，クーフラン(Cuchulainn)とフェアディアッド(Ferdia)のような高貴な生と死はもう見られない，とベンダー。彼女は帽子をかぶり，傷ついた親友を歓待する男の台詞を語り，偉大な男は口調や感性，非論理性，泣き虫の点で女と共通だ，と語る。

続いてビンダーが帽子を被り，赤いスカーフを帽子に結んでもらい，役柄交替。レゲエ音楽が流れ，黒人ミュージシャン役になったベンダーがビンダーにダンスを誘い，二人は踊りだす。アイルランド出身と語るビンダーに，俺の祖母もアイルランド人だ，と応じるベンダー。

浴室で電話が鳴る。二人は争って受話器を奪い合い，結局ベンダーが娘を押さえつけて電話に出る。男の声で支払い督促の用件のようだが，二人は互いに相手と会話を交わすうちに，電話が切れる。長電話に持ち込めなかったのを互いに相手のせいにして非難し，<嗄れ声で鷲鳥眼のぺちゃぱい>となじるベンダーに，<更年

期で空っぽの子宮＞とビンダーもやり返す。ベンダーがビンダーを追いかけて退場。

第5場　相変わらず大きなお腹のボウンにバクスターが脚の屈伸運動をさせる。ビンダーの落ち度で妊娠してしまい，羊水がナイアガラ滝のように破水して死んでしまう恐怖にとらわれたボウンが，一泊入院で済む無痛の中絶手術を検討していると語ると，それ自身の運命をもつ生命を奪ってはならない，とバクスターは反論。ボウンは，妊娠は1度で十分，男の子なら撃ち殺す，と激する。自分も含めて曾祖母から4代続いて帝王切開だった，とバクスター。天国から哀しみの銀河へ，臍の緒を首に巻き，うめきうなり，血と糞尿にまみれる苦しい旅をして生まれたことを忘れも許しもしないから，やはり中絶する，と再びボウンが主張すると，われわれはみな流産された胎児であり，短い人生を経ていずれみな死ぬのだ，とバクスター。

バクスターが赤ちゃんの命名を提案。色（「緑」や「赤」），月（「十月」「十二月」），曜日（「日曜」「火曜」），時間（「真夜中」「3時」「4時」「5時」「5時半」「5時45分」）など，奇妙な案が双方から出された後，ボウンの「壁」とバクスターの「ネックレス」を組み合わせた「壁—ネックレス」（Wall-Necklace）で合意する。ピンク・ソック同伴で検査のために，ボウンは退場。残されたバクスターは自分のお腹を触るが，もちろん彼は妊娠しておらず，がっかりする。恋人の別れを物語るような散文の台詞——自分と永遠の間には銀の月と君の思い出しかなかった——を語る。

第6場　バクスターにカーテンが近づき，男女の物語を切り出すと，バクスターは遮って退場。カーテンは布団叩きを持って踊りだす。ベンダー，登場。ベンダーとカーテンは唾を吐き合ったこと（第4場）をともに詫びるが，謝罪合戦の趣を呈する。カーテンは，寝ている男に女が唾を吐きかけ，自分の名前を男の背中に彫りこみ，二人とも死んだ，という話をし，死ぬより悪いことは生きてこなかったのに生きることだ，と語る。二人は互いに相手の死期が近いことを意味する悪口を言い合い，眼窩に苔が生え，自分が土くれなのか埃なのか分からない，と肯定して，カーテン退場。

第7場　ベンダーは帽子と燕尾服のついたブラシを持って踊りだし，唯一確実な法則は不確実性の法則，および冷たいキスだ，と語り，ブラシにキスする。ネックレスをつけたバクスターが登場。機械的に二人は抱き合い，キスを交わす。これ以降，ベンダーとバクスターは，顔を合わさぬ位置で浴槽に入り，母と息子の間柄なのかを互いに確認しあう質問をぶつけ合う。バクスターの名前にベンダーは心当たりがなく，衣服の色や鉄道車両セット，花の絵などの鍵となる話題でも両者の記憶は噛みあわない。それでも互いに好意を表明し，また訪ねてくるように呼びかけて，ベンダーは退場。

第8場　ボウンとビンダーが飛び込んできて，ボウン妊娠の責任を相手に押しつけあう。カーテンも登場。自分は妊娠できないバクスターとの間で，不妊の原因はどちらにあるかで，口論となる。カーテンがボウンを馬鹿（eejit）呼ばわりしたのに腹を立て，バクスターがカーテンに贈ったブレスレットをビンダーが壊した事実が明らかになり，馬鹿か馬鹿でないかをめぐって，4人が複雑に応酬し，最後にはカーテンがみんな馬鹿だと言うと他の者は一斉に反論，みんな馬鹿ではないと言うと，それにも一斉に反論が起こり，4人が4方向へ散って退場，ただしビンダーだけが浴室へ突進する。

第9場　ベンダー登場。ビンダーのいる浴槽に入って彼女の妊娠している腹を叩き，女の赤ちゃんならい

い，と言う。自宅を出て独立した生活を二人で過ごそう，とボウンから口説かれたかどうか，ベンダーは帽子で叩きながら，執拗に娘に問いただす。ビンダーの回答は，一人暮らしの叶わない母親がいるから無理，というものだったが，ベンダーは男から愛を告白されたらあとは下り坂のみ，と仲を引き裂こうとする。男には服や靴，香水を貢がせたあげく，本当は欲しくなかったわ，といなすのが手練手管だと教えるベンダーに，うんざりして出て行こうとするビンダー。ベンダーは引きとめようとするが，娘の凝視に諦めて，立ち去らせる。

ベンダーの独白。もとカレ（亭主）と思しき男とは会話も少なく，景色や食べ物の話がほとんど。アイルランドで高潮のときイングランドは引潮なのかな，という問いに，調べてみると言ったまま，の私。情熱はとっくに失せ，同衾してもさながら二つの亡骸のように，身じろぎしない我が身に怯え，天井を見つめる私と裏口を眺める男の視線は出会わない。暗転し，ベンダー退場。

第10場　暗闇。左肩に大きな膨らみを拵えたバクスターの呼ぶ声にボウンが登場し，背中に耳を押し当てる。バクスターの胎児（女の子と想定している）発育は順調で，今度はボウンが自分のお腹に耳を当てて聴診してもらい，こちらも順調だと分かる。しかし，ピンク・ソック（ビンダー）との交際は終わってしまった，とボウンは告白し，彼女に替わってオリーブ油を塗ってくれるようにバクスターに頼むが，背中の妊娠で体を折り曲げている姿勢のバクスターには跪く動作だけでもやっとである。カーテンとの交際を絶つようにボウンが頼むと，そもそも交際など始めてもいない，とバクスター。

首にスカーフを巻いたベンダーとビンダーが登場。単調な口調でお互いと胎児の具合を尋ねあう。ベンダーは浴室に，ビンダーはトイレ。

照明が変わり，全員影絵となるなか，登場したカーテンにスポットがあたる。カーテンの物語――道路の分かれ道で，沢山の男たちと女たちが互いに，忘れない，と声をかけて別れて行った。男と女はいつもと少しだけ違う夢を見た。男は北北東の女と，女は南南西の男と出会う夢を見たが，あとになって気づいたことは，二人はそもそも出会わなかったし，これからも決して出会わないということだった。ある日，男は意を決して自転車に乗って地上や海上を回り，高速道路上を飛んでいる時に女の姿を発見，彼女が避けないので，跳ね飛ばして止まった。女は，勇気があるなら自転車を降りて私と来なさい，と言った。終。

以上，長々と粗筋を書き連ねてはみたが，いかにも荒唐無稽な展開である。男性の女装や妊娠，張りぼてのようにカーテンをまとった登場人物，風呂場で赤ん坊（の人形）を投げ合う母娘…。しかし，一種のメタ演劇と解釈すれば，分かりやすい。ジャン・ジュネ（Jean Genet, 1910-86）の『女中たち』（*Les Bonnes*, 1947; *The Maids*, 1955）のように，登場人物は劇中で演技をしているのである。固定化された性役割に異議を唱え，男女のキャスティングを逆転させる手法は，キャリル・チャーチル（Caryl Churchill, 1938-）の『クラウド・ナイン』（*Cloud Nine*, 1979）が先鞭をつけている[9]とはいえ，カトリックの抑圧的男性原理が支配的なアイルランド社会で，性交や中絶，出産のテーマを，逆転した視点から提示した斬新さはすこしも失われていない。

もちろん，マリーナ・カーが修士課程で研究したサミュエル・ベケット（Samuel Beckett, 1906-89）の影響が極めて顕著な作品である。たとえば，小道具としての第1幕第2場，第2幕第2，4，9場での「帽子」の使用，カーテンの物語での「自転車」への頻繁な言及，『足音』（*Footfalls*, 1976）に見られるような反発と依存の母娘関係，『なに　どこ』（*What Where*, 1984）の4人—ボム，ビム，ベム，バム—を想起させるかのような［b］音で頭韻を揃えた登場人物4人の命名，などである。

ストーリーテラーの役回りを果たすカーテンは，劇場の「緞帳幕」のカーテンを表わし，＜演劇＞の比喩として扱われているのであろうか？　『ハムレット』第3幕でポローニアスが居間の垂れ幕の背後に隠れて暗躍しているように，＜カーテン＞は衝立の場面，一種の劇中劇を作り出すこと，衣服がジェンダーの象徴であるとすれば，＜カーテン＞はその衣服自体を覆い隠していることなどが指摘されている。[10)]

寓話的なストーリーテリングを戯曲に組み込む手法は，マクドナ（Martin McDonagh, 1970-）の『枕男（ピロウマン）』（*The Pillowman*, 2003）を想起させるが，執筆はマリーナ・カーの方が15年も先んじている。

②『鹿の降伏』（*The Deer's Surrender*）

トリニティ・カレッジに程近いアンドルゥーズ・レイン劇場（座席数220，附属スタジオは76席）で上演された以外は，粗筋，主題，キャストなどいっさい不詳。

③『この愛という代物』（*This Love Thing*）（フル・レンクス）

ネットからの情報[11)]によれば，ルネサンス期の芸術家たち（レオナルド・ダ・ヴィンチ，ミケランジェロ）や彼らが描いた宗教上・歴史上の人物たち（モナ・リザ，マグダラのマリア，イエス・キリスト，イヴ）が，愛とは何か，芸術とは何かをめぐって，明るい調子で論議をたたかわせる内容らしい。映画『ダ・ヴィンチ・コード』（*The Da Vinci Code*, 2006）が人気を呼んでいる現在，マリーナ・カーがダ・ヴィンチに何を語らせているのか，興味は尽きないが，テキストの刊行を待ちたい。

初演は北アイルランド，ベルファーストのTinderbox Theatre Company（1988年結成）とダブリンのPigsback Theatre Company（同じく1988年結成で，1997年にFishamble Theatre Companyと改称）の共同制作で，ベルファーストのカレッジ・スクエア・ノース通りにある，座席数90のスタジオ・タイプの小劇場OMAC（Old Museum Arts Centre）で上演された。カーの11作品で唯一，北アイルランドで初演されたものである。

④『ウラルー（哀歌）』（*Ullaloo*）（フル・レンクス）

この作品は実際にはマリーナ・カーのデビュー作品と見なしてもよい経緯がある。1989年のダブリン演劇祭において，台本朗読の試演（rehearsed reading）の形式で発表されたからである。しかし，本格的な舞台化は2年後に持ち越されていることから，本稿ではこの作品を第4作として扱うことにする。

登場人物はトムレッド（Tomred）という男とティリー（Tilly）という女の2人のみ。標題の「ウラルー」は死者を悼む哀歌を意味するアイルランド語で，エッジワース（Maria Edgeworth, 1767-1849）の長編小説『ラックレント城』（*Castle Rackrent*, 1800）では，'Whillaluh'という綴り字で現れ，エッジワース自らが施した用語解説のなかで，この'Ullaloo'が異形として挙げられている。なお，翻訳書では「泣き節」[12]と訳語を当てている。

⑤『ザ・マイ』（*The Mai*）2幕

マリーナ・カーの作品の中で，日本で最初に邦訳上演で紹介されたもの。2005年10月10日～14日および11月21日～24日，東京演劇アンサンブルにより邦題『マイという女』（舟橋美香　訳），志賀澤子・演出でブレヒトの芝居小屋において9回上演された。（筆者は11月23日公演を観劇。）舞台写真（高岩　震・撮影）を提供していただいた[13]ので，末尾に参考資料として掲げ，写真場面のおおよその該当箇所を以下の梗概のなかで明示する。

なお，この梗概のなかでミリーの独白につけられた［番号表示］はテキストにはない。形式段落ではなく意味のあるまとまりを単位に，のちの論述の便宜上，筆者が施したものである。また，独白は斜字体を用いて劇の進行と区別したが，テキストは通常のローマン体であり，斜字体ではない。

第1幕　1979年の夏。梟ヶ湖（Owl Lake）を臨むザ・マイ（The Mai）の新築の家。5年前に蒸発した夫ロバート（Robert）が帰ってきて，チェロを演奏する音色にマイは驚く。マイの躯をチェロに見立てて弓で愛撫し［**写真A**］，スカーフや香水，花束，ウィスキーの土産を手渡す。16歳の娘ミリー（Millie）にはお菓子と自分が着ているセーターを贈る。

ミリーの独白［1］　5年前，11歳のとき，父ロバートが突然，家出。失意のマイはホテルで酒をあおり，私は「肉屋で針と糸を買う」という妙なお遣いを頼まれるが，もちろん果たせない。マイは泣きながらも，ロバートがまた戻ってきて幸せに暮らせる，と語る。

同じ晩の遅い時刻。スリップ姿のマイが幸福で恍惚としながら，白鳥の飛び立つ様を眺める。

ミリーの独白［2］ この新居の建つ土地は様々な業者の嘱望の的だったが，どういうわけだか，マイに格安価格で売却された。新居完成後，マイは窓から月に向けて夫が帰ってくるように願いを唱えていた。

マイの祖母フレクローン（Grandma Fraochlán）の指図を受けつつ，38歳のマイの妹（次女）コニー（Connie[14]）が大きなカラハ舟のオールを運び入れる。このオールは祖母にとっては亡き夫の形見で，日頃はオールと添い寝もしているらしい。なんとか無事にオールが搬入されると，フレクローンはチョコを自分のハンドバッグから出すようにコニーに指示するが，どのバッグか思い出せない。大統領から百歳[15]のお祝いに貰った百ポンドも，すでに先週，煙草やチョコの嗜好品に使い果たしたことも忘れてしまっている。

ミリーの独白［3］ 祖母フレクローンの名前はコネマラ地方ボフィンの北方のフレクローン島[16]に由来するが，彼女の母親はスペイン人かモロッコ人の船乗りとの行きずりの一夜で身篭り，浅黒い肌はこの父親譲りだという。

フレクローンの心配をよそに，マイはロバートの帰宅で17年前の新婚気分に戻った喜びを伝える。そんなマイに，フレクローンはマイの母親（自分の娘）エレン（Ellen[17]）の自慢話を始める。この話を聞き飽きているコニーは，エレンがダブリン大学医学部入学者の紅一点であったことをおどけて語る。エレンは在学中の乱痴気騒ぎで煉瓦職人の男に妊娠させられ，19歳でその男と結婚を余儀なくされた。1938年[18]のことだった。［このとき，出来ちゃった婚で誕生したのが長女マイである。］

ロバートの様子を尋ねるコニーに，今秋には大学に復職予定であり，作曲活動も順調の旨，マイは答える。フレクローンは，最近よくみる夢（地獄の大魔王ルーシファー[19]と意気投合し，愉快に過ごす夢）や，亡き夫トーマス（「9本指の漁師」）との馴れ初めを，酩酊しつつ語りだす［**写真B**］。コニーは夫デレク（Derek）が待っているからと，夕食の誘いも断って，マイ家を早々に辞去。

ミリーの独白［4］は，フレクローンの独白と交互に交わされる。 男だけが女だらけのハーレムを楽しむ理由をスペインのサルタンに向かって詰問し，1918年，38歳の誕生日にクレッガン[20]（Cleggan）の縁日で過ごした夫との愛にあふれる一日を振り返るフレクローンの独白の司会補助的な役割をミリーの短い台詞は果たす。

ロバートが登場して我に帰ったフレクローンは，ロバートの身勝手な蒸発を非難し，彼の父親が家族を残してアメリカに出稼ぎに行ったことを指摘して，人間は同じことを繰り返してしまう，オーケストラの演奏法は変わっても同じ楽曲だと，ロバートを批判する。ロバートは反論して退場。

37歳の三女ベック[21](Beck)が，祖母の誕生日祝いに阿片パイプと阿片を持って登場。喜んだフレクローンは，待ちきれずにすぐに二人で阿片を吸いに退場。

夕方。ロバートの演奏を聞き終えて，マイはロバートに突然の帰宅の訳を尋ねる。彼はマイが死に，チェロケースを柩にコクチョウが葬式馬車を引く夢を見たのがきっかけだったと語る。マイも結婚前夜に見た夢の話――ロバートが老婆にナイフで路上刺殺され，子どものロバートに川で出会うものの，いなくなり，黒い洞穴目指して進んでいく夢――を告白する。ロバートはマイの存在の重要性を放浪の間に認識したと語り，パリ行きの航空券を渡して夫婦旅行を提案し，二人で町へ外食に出かける。

ミリーの独白［5］ 私は父ロバートと互いに罵倒の応酬[22]を繰り広げたものだが，ロバート帰還の1年半後，ロバートとともに洋品店でマイの通夜の装束を買いに出かけた。マイの生前の希望の青色の中から，水のような青の衣装を選んだあと，ロバートは子どもにぶつかられて陳列台を倒す。針や糸が虹のように床に散乱する。

昼間。湖でマイの子どもたちが水遊びする歓声。ベックが自分はもう子どもが持てない，と言うと，マイは聖書や身内の高齢出産[23]の例を持ち出し，励ます。ベックは，バツ1で2人の息子がいるウェズリー(Wesley)という53歳の男性の交際相手がいて，大学生の息子たちに気に入られていて，5ヶ月前に実は正式に婚姻したこと，しかし，年齢詐称（6歳若く）と職業詐称（常勤教員）を打ち明けたことがもとで不和を招き，まもなく離婚に踏み切るつもりであることを告白する。子ども時代から次女コニーと三女ベックは仲良しなのに，長女マイとは疎遠な関係だったこと，学校の成績が良くなかったベックにはマイに対する劣等感や反感めいたものがあることが明らかになる。

ミリーの独白［6］ ベック自らが自己顕示的に結婚の事実を周囲に明らかにしたため，親戚中の知るところとなり，スカプラリオ（scapulars）[24]をつけ，カトリックの信仰に篤い2人の伯母たちが，なんとか離婚を思いとどまらせるために訪問する。

伯母たち――75歳のジュリー（Julie）と61歳のアグネス（Agnes）――はマイの壮麗な新居を見て値踏みし，子どもたちが厳格に躾られていること，ロバートも家事手伝いをすることなど噂話をする。ベックのヘア・ダイや大胆な服装が気に入らない伯母たちは，彼女が既に妊娠している事態の可能性を思い巡らし，離婚阻止の説得工作の方針を協議する。煙草に酒を嗜むフレクローンと絶対禁酒論者の（彼女の長女）ジュリーとは相変わらずそりが合わず，マイの母親エレンが27歳のときのお産で亡くなったことや，シングル・マザーの道を許すようにフレクローンを説得するように頼まれながら果たせなかったことを持ち出し，諍いとなる。アグネスはベックのオーストラリア旅行に話題を転じ，かの地で出会った夫のウェズリーとの離婚話に持ちこむ[**写真C**]。ジュリーは，ベックの男性遍歴を咎めるが，フレクローンは愛とセックスの崇高さを訴えて，ベック

を擁護する。フレクローンとジュリーの母娘喧嘩は収まらず，ベックはフレクローンを寝室へ誘い，アグネスも同行して退場。

残されたジュリーはマイ相手に，母親フレクローンの愚痴を語る。夫トーマスへの愛に浸りきって育児を蔑ろにし，トーマスの死後は阿片漬けで自殺未遂もあり，娘エレンを煉瓦職人と結婚させておきながら，大学を続けていれば手に入れられた幸せを絶えず繰言のように持ち出しては，エレンを精神的に苦しめたのだという。ジュリーはマイに新築祝いの金子を渡し，匿名でベック宛ての結婚祝い金を預ける。ベックの夫がオーストラリアのアボリジニーでなかったことに安堵しながら。両者退場。

ミリーの独白［7］ 梟ヶ湖は，アイルランド語では「夜の老婆の湖」(Lake of the Night Hag) もしくは「黒い魔女の淀み」(Pool of the Dark Witch) を意味する。山の神ブルーム (Bloom) の娘クウィールチェ (Coillte) は，花の王ブラー (Blath) に恋をし，二人は楽しく暮らしていたが，秋になるとブラーは黒い魔女の呪いで失踪してしまう。彼が黒い魔女のねぐらにいるのを発見した彼女は失意の余り泣きつづけ，涙の湖ができる。黒い魔女はその湖の中にクウィールチェを突き落とす。春になって魔法が解けたブラーが懸命に探しても，彼女の姿は水の中。ブラーが彼女を偲んで吹く葦笛に，水鳥たちが怯えて飛び立つ。この土地を売ってくれたブレイディから聞かされたこの伝説の意味をまじめに考えることもなく，また神々や人々が，進路を変えるように呼びかけているにもかかわらず，私たちは歩き続けたのだった。

この独白の終盤部分で，マイの死体を抱えて佇むロバートの姿が現れる。暗転。

第2幕 翌年1980年の夏。マイの40歳の誕生日に，フレクローンとベックが来訪。挨拶を交わすうちにマイは泣き出す。半月前に夫ロバートの浮気が発覚したのだった。相手は地元の女で，マイは彼女の職場まで押しかけたが，逆に居直られたのだと言う。マイは夫がまた家を出て行くのが怖くてなにもできない，と嘆く。フレクローンとベック，慰めの言葉をかけて，退場。

ミリーの独白［8］ ロバート帰還の前年の夏，マイは新築費用を捻出するために，ロンドンの美容院の掃除婦としてアルバイトに出かけた。私たち子ども4人は大家族の知人宅に預けられた。アラブ人経営の美容室では，5歳のアラブ人王女に気に入られ，遊び相手になるだけで多額のチップを得た。私はその王女に激しい嫉妬を抱いた。

夜，ロバートが帰宅するのを聞きつけ，マイは履いていたショーツを脱いで窓からロバートの顔に投げつける。入室したロバートはショーツをたたんで置き，土産の女性月刊誌とイチゴと差し出す。マイは雑誌を拾い読みして投げ捨て，イチゴを無理に夫の口に運んだり，チェロを演奏して苛立たせる。(実は，マイは文学の学士を得た後，大学院に進学し，オーケストラでチェロを弾いていたのだった。)

マイは夫の素行に関して卑猥な悪口をぶつけ，帰宅後は全収入を家計に入れていると主張するロバートに，5年の蒸発期間の家族の生活費や教育費は自分が賄ったこと，父親不在の間に子どもたちが味わった精神的苦痛について追及する。ロバートは激昂して退場。マイもしばらくチェロ演奏で気を鎮めた後，退場。

ミリーの独白［9］ ロバートへの嫌悪から，土地を斡旋してくれたブレイディの嫌がらせが始まった。庭の垣根を壊し，暖炉の灰を不法投棄し，赤いブルーマー1枚の姿で獰猛な牝牛ビリー・ザ・ブラックに跨って庭を荒らしまくり，果ては湖の雄のハクチョウを射殺し，牝の嘆きの甲高い鳴き声が続いたのだった。

夕方。外で飲んできたらしいコニーとベックが誕生日祝いに登場。マイは，まだ幸せだった去年の夏にコニーに来て欲しかった，と恨み言。コニーは夫デレクがロバートを嫌っていたのでとどまらなかったのだった。コニーは，結婚相手を得るまでいろいろな男性と付き合ったが，その誰とも寝たことはなく，一度行きずりの外国人とでも一夜を過ごしたい，と願望を語る。そうした秘めた願望を素直に実行に移しているのがロバートであって，世間の評判が悪くても，最後に自分の元へ帰ってきてくれる以上，ロバートを追い出すことはできない，とマイ。先の人生を悲観し，フレクローンに培われた大きすぎる希望の重圧に負け，人生の宝物をすこしずつ失っていくことをマイは嘆く。昔，3姉妹でベッドの中で歌っていた歌を3人は歌いだす。気付かれずに登場したロバートは，彼女らを見つめる。

ミリーの独白［10］［この時点のミリーは30歳の設定］5歳になるジョーゼフという私生児がいる。父親については架空の話をでっちあげて聞かせているが，実際には，妻子ある夫を誘惑してできた子で，出産当日にその妻から5千ドル（数十万円）の手切れ金を得たこと，子どもが2歳になって認知を求める手紙を出したが，梨のつぶてだった。

黒の夜会服を着てマイが登場。5年ぶりに舞踏会に出かける予定で，フレクローン，ベック，ミリーはマイの美貌を称賛する。しかし，続いて現れたロバートは一言の褒め言葉もかけずに，酒を飲み干して先に出て行く。失望を隠しながら，マイも退場。

ベックはワグナーの『トリスタンとイゾルデ』の「愛の死」のレコードをＢＧＭでかけ，フレクローンを阿片吸飲に誘う。二人は阿片に陶酔しながら，人生を語り合う。フレクローンは，裸で生まれ裸で死んでいく人間を操る神の意志を訝り，ベックは日常生活の単調さを嘆く。フレクローンの母親は，夫はスペインのサルタンで自分は公爵夫人だと娘に教え込み，夏にはサルタンのお迎えが来ると毎年のように言い聞かせてきたらしい。私生児を持つシングル・マザーの屈辱や悲哀を知っていただけに，フレクローンは娘エレンの妊娠に対して法的結婚を強制せざるを得なかったのだと語る。ベックは，父親である煉瓦職人の再婚先の家庭をロンドンに訪ねたことを明かす。父親は，聞かされたような無学で無作法な人間ではなく，情愛に溢れていて，なぜ赤ん坊の自分を引き取ってくれなかったのか，と心の底で感じたのだという。フレクローンはエレンに結婚さ

せず，違った人生を送らせるべきだった，と懺悔する。

しばらく立ち聞きしていたマイが登場。阿片吸飲を慌てて隠そうとする二人だが，逆にマイも阿片を吸い始める。彼女は舞踏会でロバートと喧嘩別れし一足早く帰宅したのだった。遅れて，ロバートも帰宅。舞踏会場でロバートは別の女性に声をかけ，放っておかれて怒ったマイは自動車のキーを要求し，先に家路についたという顛末。自分がどのように悪口を言われていたか，執拗に問いただすマイに，世間体や常識的基準は自分にはあてはまらない，とロバートは反論，夫婦喧嘩はさらに激しさを増して，罵倒合戦が続く［**写真D**］が，マイはスティーヴン出産のときに夫が病院に迎えに来てくれなかったことを指摘して，泣き崩れる。そして，もう耐えられない，と言って一人で退場。ベック，フレクローン，後を追って退場。

クリスマス。ジュリーとアグネスの伯母さんがベックの手料理を堪能したところ。マイは離れたところでサングラスをかけて座り，ロバートは新聞を読む。伯母二人は先祖の墓参りを済ませ，沼地にある墓石が陥没していたと告げると，フレクローンは自分の亡骸は夫が水死した海域に水葬してほしい，と言い出す。（ロバートは友人宅へ外出。）そして年中行事になっている物語——出漁中のトーマスは虫の知らせで泳いで引き返し，第3子の難産に苦しむ自分のもとへ駆けつけ，新生児と対面できたが，体温低下で人事不省となり，左手小指を欠損，愛の証しにその指を記念に取っておいたのが，「9本指の漁師」の由来である——を語り，自分は子どもよりも夫を愛するタイプの人間だと断言して憚らない。

ベックが話題をアグネスの花の趣味に変えると，マイも母親エレンが「花の川」を意味する川を歩きたがっていた想い出を語って，ふっと退場。

ミリーの独白［11］ 溺れる夢，コクチョウに水中に引き込まれる夢を始終みる。梟ヶ湖は私をトラウマのように束縛し，過去のさまざまな想い出，とくに窓辺にいる母マイの姿が，去来する。

真夜中，ネグリジェ姿のマイが登場。ミリーも起き出して，今晩も戻らぬ父親ロバートと別れるか，逆に浮気するようにけしかけると，一度だけ行きずりの男と一夜を過ごし，[25]そのスリルと興奮の味が分かった，とマイは意外な返事をする。しかし，自分にはロバートが絶対に必要不可欠で，また2，3年したら戻って来る，彼なしには生きる理由がない，と言って，先にミリーに寝室に戻らせる。

マイは窓の外を眺め，部屋を出る。水鳥の羽ばたく音。水音。静寂。暗転。

戯曲の幕切れは，マイの入水自殺を暗示して終わるが，これはすでに第1幕の最後で，マイの死体を抱きかかえるロバートのタブロー（静止画）の形で先取りされている。（未来の出来事の先取りは，次の作品『ポーシャ・コフラン』ではより明確な形式で，『猫ヶ沼のほとりで』では戯曲の冒頭から，提示されることになる。）家族の愛に包まれて過ごすべきクリスマスの深夜の自殺は，マイの深い絶望を物語る。

＜遺伝の呪縛＞

フレクローンがいみじくも語るように,「我々は同じことを繰り返してしまう。演奏方法は変わっても，曲は同じなのさ」(123) に主題は集約されるだろう。スペイン人水夫と一夜の契りで妊娠した「公爵夫人」の淫蕩な性格，空想世界への逃避癖，育児より恋愛重視の自己中心性は，そのまま私生児として成長したフレクローンに受け継がれ,「９本指の漁師」トーマスとの蜜月と彼の死後の阿片への惑溺につながった。そのフレクローンの秘蔵っ子エレンもまた，煉瓦職人と一夜を過ごし，風来坊のような彼の子どもをもうけつつ，お産で亡くなった。そのエレンの長女マイは，決して育児に手抜きをした訳ではないが，夫を迎えいれるマイホーム資金稼ぎのために，ミリーを知人に預けて淋しい思いをさせている。マイもまた，魔が差したかのように行きずりの関係を結んだことが終盤で語られるし，淫蕩の血は三女ベックに顕著に流れている。そして，マイの娘ミリーも，妻子ある男性と不倫をして，私生児をもうけている。正式に法律上の婚姻をして嫡子を作り，離婚や別居をせずに平凡な結婚生活を遂行する営みが，少なくとも「公爵夫人」以降の５世代にわたって疎外されてきているのがわかる。ミリーの子どもは男子であるから，ここでこの連鎖は途切れるのかもしれないが，我々は親やその先祖と同じことを，もしかすると代々繰り返しており，同じ主題歌を別の世代の演奏家が奏でているだけなのかもしれない。それは，近代科学的に言えば，遺伝形質（ＤＮＡ）の決定に他ならない。我々は遺伝の特性に反抗し，そこから逃げることは出来ない。もしできるとすれば，その能力もまた，遺伝子に内在していたはずだという論理になるからである。

では，人間はみずからの意志と努力で,「変わる」ことはもうできないのだろうか？戯曲の示唆するところはこの問いに否定的であるけれど，エレン以外のフレクローンの子どもたち（ジュリーとアグネス）が，遺伝とあえて闘ってきたかのように，フレクローンと性格の相違を見せ，反発をバネに個性を発現している点は注目しておきたい。

＜語りの視点の問題＞

舟橋美香氏が指摘するように[26], ナレーターとして過去を回顧し, 物語の進行司会を補佐するミリーの役回りは，テネシー・ウィリアムズ(Tennessee Williams, 1911-83)の『ガラスの動物園』(*The Glass Menagerie*, 1944) のトム（Tom Wingfield）や，ブライアン・フリール（Brian Friel, 1929-）の『ルーナサの踊り』(*Dancing at Lughnasa*, 1990) のマイケルを技法上の先駆者としている。舟橋氏はとくに後者の語り手マイケルと『ザ・マイ』のミリーを比較し，前者がその固定的な視点を通して見た過去の出来事として，いわば額縁のように物語を閉じ込めて現在と隔絶させている

のに対し，後者は物語と並行して置かれることで現在と過去の境界を曖昧にする効果がある旨の興味深い指摘を行っている。[27]この点はマリーナ・カー自身が以下のように述べていることと照応する。

「マイが劇の中心です。みんなが彼女のもとにやってきて，離れていくのです。本質的に彼女の物語なのです。ミリーにその役を継いでもらおうとは思いませんでした。だから私は劇を語り手によって始めませんでした。マイに劇を始めてもらい，マイに終わらせたかったのです。ただミリーには，その枠組みの中で言いたいことを言わせたかったのだと思います。結局のところ，ミリーは語り手に過ぎないのです。彼女は物語を，ある観点から，語ります。最初の草稿段階では，ミリーはすこぶる事実だけを語って，場面場面を埋めている状態でしたが，そんな必要はないことに気づいたのです。必要なのは，ある観点から湧き出てきて，やがて謎を解明してくれる物語なのです。私は出来栄えにとても満足しています。」[28]

＜マイの職業について＞

マイが故郷コネマラに戻らない理由として,「そう簡単には別の学校の校長職は得られないだろうから」(114) と答えている台詞から判断して，彼女は現在，オファリー州の小・中・高等学校いずれかの女性校長の任にあるらしい。芝居の幕開きで彼女は腕一杯に抱えた書物を本棚に戻している。第2幕では「教育が自分の仕事」(155) だから，週末には「プラトンとアリストトレスの教育論を読んだ」(155) と語っているし，おそらくロバートの不品行が原因で「教育委員会の面前に呼び出された」(177) こともある。ただ，これら以外の点では，マイが多忙を極めるはずの教育管理職にある人間だと感じさせるものは希薄である。公務をプライベートな時間に持ち込まない主義なのか，彼女は様々な教育問題に関してまったく語っていない。登場人物であるミリーを除くほかのマイの子どもたちについては，名前（オーラ，スティーヴン）が言及される程度で，どういう性格の子どもとして生育しているかも分からない。マイもまた，ロバートとの愛を至上のものと見なし，自分のこどもたちへの配慮や関心が薄いことが分かる。そうした人物が子どもの教育現場でリーダーの職責を担っていることには強い違和感を覚える。それは，校長職の母親を持つマリーナ・カーが意図して設定した職種なのかも知れないが，マイの実生活が筆者にリアリティを感じさせない要因である。

＜標題について＞

ファースト・ネイムの「マイ」に定冠詞が付いているのは何故なのだろうか。邦訳上演においてミリーの第1独白の冒頭で「マイ—風薫る五月の女」（テキストに該当句はない）という言葉が添えられたのは，May（5月）を暗示する補足と思われる。同

様に，小嶋千明さんは「アイルランドで一番美しい季節である五月に由来する名」と解説[29]で述べている。だが，綴り字が異なるし，それなら「メイ」の発音で良いわけだし，やはり定冠詞[30]は不要である。ちなみにアイルランド語で5月を意味する単語はBealtaine（ベアルタン）であり，Maiというアイルランド語は辞書の見出し語にはない。小嶋さんは同じ解説で「聖母マリアに因む愛称である」とも記している。これは，アイルランドのダンドークで研修中の本学部卒業生（久保晴佳さん）にお願いして現地の知人に質問して貰い，確かであるとの情報を得た。（正しくは「メイ」と発音すべきだとのことであるが。）一方で，裏づけがとれないものの，「アイルランド神話において，わが子を殺す人物からその標題を採った」[31]とする言及もある。

聖母マリアと5月に微妙に絡むのは，聖母マリアへの＜5月礼拝＞(May devotion)の宗教行事が存在することである。もともと18世紀のイタリアで盛んだった慣習がアイルランドにも広まり，1818年ウォーターフォードの修道院で初めてこの5月礼拝が営まれ，1835年には同地の大聖堂でも実施され，この儀式はさらに広がりを見せたという[32]。このこととなんらかの関係があるかも知れない。

＜夢の分析について＞

突然帰宅したロバートにマイが理由を尋ねる場面が第1幕半ばにある。ロバートの答えは，マイが死んでチェロ・ケースに収められ，コクチョウが導く霊柩車によって天上へ舞い上がる夢を見たからだというもので，マイはこの答えに気分を害して，私の葬儀に戻ってきたのか，と咎める。

フロイト心理学では，「ある人物が夢の中で死ぬことは，その相手にいなくなって欲しかったり，早く忘れ去ってしまいたかったり，という否定的な気持ちの表われである」[33]とされる。フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）の『夢判断』（*Die Traumdeutung*, 1900）では第V章「夢の材料と夢の源泉」のD節「類型夢」(b)「近親者の死ぬ夢」の項目でこの事例が詳述されている。フロイトがここで近親者としているのは，両親や兄弟姉妹，子どもであるが，おそらく妻や夫という配偶者も含めてよいだろう。そして「そういう死にひどく悲しみを感じて，眠りながらも熱い涙を流すような夢」こそは，「その夢内容が証明しているもの，すなわちその身内の人が死んでくれたらいいという願望を意味している」[34]と躊躇なく断言する。

フロイトのこの断言はマイが直感的に感じ取った解釈と一致するけれども，ロバートにとっては酷な解釈であろう。「それに死の夢を見ることは，いつだって，なにか別のことを意味しているんだよ。夢というのはそんなに悪趣味なものじゃなくて，遠慮がちで，いわく言いがたいものなんだ」(125) というロバートの懸命の弁明は，決して逃げ口上とばかりは言い切れない。なぜなら，マイの方でも，ロバートが路上で老

婆に刺殺される夢を，結婚前夜に見ているからである。同じ夢解釈を適用するなら，マイもロバートの死を無意識のうちに望んでいた，ということになる。妻が夫を殺す例は，後述の『エアリアル』では実際に描かれることになるが，マリーナ・カーの前期作品群の妻たち（このあとの『ポーシャ・コフラン』のポーシャや『猫ヶ沼のほとりで』のヘスター）は，殺意をむしろ自分に向ける内向性を特徴とする。

登場人物たちが表現する様々な情感，とりわけ陰鬱な情感の根源・深淵はどこにあるのかと訊かれて，マリーナ・カーは次のように，無意識の心の動きを体現した夢が持つ創作上の重要性について力説している。

「わたしたちひとりひとりのなかに，千の人生があります。末梢的にしか気づいていない壮大な歴史があります。夢は私にとってたいへん役に立ちます。眠っているあいだに人生まるごとが進んでいるみたいです。それらすべてを慎重に記録するなら，ひとつひとつに物語が作れるでしょう。無意識を材料に，もちろん意識したものを加味しながら執筆するのが最高のように思えます[35]。」

＜針と糸＞の換喩について

冒頭近くのミリーの独白［1］では，肉屋で＜針と糸＞を買う，という謎めいた言伝が語られる。たしかに糸で頑丈に縛ってある肉塊もあるから，精肉販売上の特殊な工具があるのかとミリーが考えたのも無理はない。夫に捨てられて屈辱と混乱状態にあるマイが，ひとりきりの時間を稼ぐために，すぐには解決しない不条理な買い物を故意に命じたのかもしれない（第2幕冒頭でもマイは子どもたちを映画館へ厄介払いしている［149］）し，極度の精神混乱が，一種の失読症（dyslexia/alexia）を引き起こして，「洋品店」と言うべきところをうっかり「肉屋」と言い間違いさせたのかもしれない。様々な解釈が可能な面白いエピソードである。ところが，この＜針と糸＞が意味するものは，ミリー自身の口から，「もう一度私たちを縫い合わせるだろう，例の魔法の糸をマイは捜し始め，梟ヶ湖でそれを見つけた」（111）と，時をおかずに種明かしされる。つまり，ほつれてバラバラに四散しそうな家族ひとりひとりをつなぎとめるための手段，という意味で＜針と糸＞は使われ，「家族の絆」の換喩（metonymy）として機能していることがわかる。ベックの2度目の登場場面で，マイが息子のズボンを（針と糸で）繕っている場面（129）は，幸福な家族生活の穏やかな陽光に溢れている。したがって，その重要な構成員のひとりであるマイの信じがたい死は，ミリーの独白［5］において，洋品店の床にぶちまけられる針や色とりどりの糸として表現されることになる。マイの死装束を買いに出かけたミリーとロバートが，死の衝撃から立ち直れずにまだ「ふらついていた」（reeling［128］）のは，「糸巻き（ボビン）」（reel）から糸が「巻き上げられていき」（reeling），布地を刺すこともなく空回りする空虚な響きを

縁語としてこだまさせる。母を亡くしたミリーと妻を失ったロバートが洋品店の「通路を通って」(moved down the aisle [129]) 戸口に向かう様は，それまでいがみ合っていた父娘の絆が厳粛に深まった (go down the aisle＝get married) 印象も与えるが，それも束の間，母親の手を逃れた少年によって破壊され，父親は後ろ向きに床に倒される…。<針と糸>の比喩は中盤以降には現れず，謎解きがやや拙速な印象を与えることは否めない。ミリーの独白[8]では，子沢山の婦人服仕立て屋(dressmaker)の知人宅にミリーたちは預けられている。この辺りになにか細工を施すなどして，終盤でもう一度，印象的な言及を工夫すれば，タペストリーのような統一した鮮やかな模様が描けたかも知れない。

<共和国憲法における女性の地位規定>

『ザ・マイ』が提起する問題は，1937年憲法によって女性の果たすべき役割が国家とカトリック教会によって家庭に限定され，1980年になっても女性の地位が抑圧されていることである。以下に，このことを如実に示す条項を一部，抜粋しよう。

第41条[36)]

2(1) 特に，国は，婦人がその家庭内の生活により国に支持を与えること及びその支持がなくては公益の達成が不可能であることを承認する。

(2) したがつて，国は，母親が経済上の必要から，家庭内における義務をうちすてて労働に従事することを余儀なくされることのないように保障することに努力しなければならない。

3(2) 婚姻の解消を認める旨を規定するいかなる法律も制定してはならない。

第2項は女性が家庭にとどまることを要求し，就労による社会参加を回避させようとするものであり，第3項は離婚の禁止である。すなわち，女性は「家庭内にあって，男性と国家を支える存在とならなければならない，と国によって定められ」，「ジェンダーが，法律によって固定化された[37)]」ことを意味する。しかもこの憲法に先立つ1925年には離婚禁止法と既婚女性を公務員に採用することを禁止する公務員規正法が，1927年には女性全般を法曹界から締め出す法律，1935年には避妊薬の販売・宣伝・輸入を禁ずる法律が制定されており[38)]，憲法はこうした法律運用の実情をいわば追認するものにすぎなかったようだ。そして離婚禁止の撤廃は1995年の国民投票まで，就職に関する差別法は1977年の雇用機会均等法まで，待たねばならなかった。エレンがマイを身篭った1938年には中絶はおろか，避妊薬すら認められておらず，家庭を重視する新憲法のもとではあまりに恥辱的なシングル・マザーの道を選ぶよりも，解消でき

ないながらも婚姻関係を結び，世間の批判にさらされない家庭を築くことが当然視される風潮にあったものと想像される。

1980年時点で三女ベックが離婚の意思を表明するのは，おそらくウェズリーとの婚姻がアイルランド国内ではなく，オーストラリアで行われたことによると思われる。前述の憲法41条3(3)には「外国の民法に基いて婚姻を解消した者は，その解消した婚姻の当事者の生存中は，この憲法によつて樹立された政府及び国家の管轄権内においては，有効な婚姻を締結することができない。[39]（以下省略）」との規定があり，外国で結婚したベックはもちろん離婚が可能であるが，アイルランド国内で再婚するためにはウェズリーの死亡を待たねばならないことになる。伯母アグネスは，離婚後の再婚の期待を気軽に姪ベックに匂わせている（143）ようだが，ウェズリー同様の外国人との，あるいは外国での結婚に制限されることを認識していないのかもしれない。

＜「父帰る」のモチーフ＞

長い間留守にしていたロバートの帰宅は，まさしく「父帰る」のモチーフである。これは裏返して言えば，ロバートの放浪癖，非定住性を示すものであり，彼の心に潜む「ティンカー性」を表わしている。もちろんチェロ奏者として大学の音楽講師を務めた経歴や演奏レコードも発表している彼は，教養人と呼びうる人間には違いないが，第2幕の夫婦喧嘩の場面で彼がマイの卑語を非難するときの口癖が「ティンカーみたいな口をきいて」（156/175）であることを思い起こせば，嫌悪しているはずのティンカー同様の暮らしをしてきたロバートは自らに唾を吐きかけているに等しい。蒸発していた5年もの間，彼は安宿を渡り歩いていたのか，愛人の家に居候していたのか，どのように生計を立てていたのかすら，分からない。少なくとも彼が一ヶ所に留まって堅気な日常生活を送ってはおらず，気の向くままに旅を続けて移動していただろうという点では，キャラヴァン住まいのティンカーとよく似た暮らしをしていたのではないか，と想像される。マイ・ホーム（洒落ではない）を建設して定住志向のマイと放浪志向のロバートの夫婦は，『猫ヶ沼のほとりで』の放浪志向のヘスターと定住志向のカーシジの内縁夫婦と，その性向が夫と妻で逆の立場に設定されていることも興味深い。家を守るのが女性というのが伝統的保守的イデオロギーであるなら，カーはまず『ザ・マイ』ではそれに従い，『猫ヶ沼のほとりで』ではそれに逆らったことになる。

⑥『ポーシャ・コフラン』（*Portia Coughlan*）（紀要33号拙論参照）

追記　前稿で今後の調査・研究課題として留保した事項について，一部判明したことを以下に補足したい。

まず，国立産科病院からの委嘱作である点に関して。これは同病院の創立百周年企画であり，マリーナ・カーは実際に，この病院内の一室をあてがわれ，午前10時から11時に起床，街へ出て2，3時間喫茶店でコーヒーを飲みながら構想を練り，病院へ引き返して執筆に取りかかるという日課[40]だったという。毎日のように新生児が誕生する産科病院での執筆は作品に影響を与えたようだが，病院側から期待されているようなものは書きたくなかった[41]，とむしろそういう環境に反発するかのように，子どもを愛せない母親ポーシャがあえて造型されたことをカーは仄めかしている。

時間的に第2幕と第3幕が逆転している構成に関しては，ポーシャの死をまんなかの第2幕に置くことで「作品を引き締める焦点」になり，もし時間どおりの配列なら「まったくのメロドラマ」になっただろう，とこの構成の効果にカーは自信を示している。[42]

双生児が登場する文学作品として，創世記のなかで双生児の実の姉アダを妻に娶った[43]カインを描いた，バイロン（George Gordon Byron, 1788-1824）の劇詩『カイン』（*Cain*, 1821）と，トーマス・マン（Thomas Mann, 1875-1955）の『選ばれし人』（*Der Erwählte*, 1951）を追記しておきたい。[44] 後者では，フランドルおよびアルトワを治めるグリマルト公とバードゥヘナ夫人は四十路になってようやく子宝に恵まれたが，双生児の出産とともに夫人は他界する。男女の双生児ウィリギスとジビュラは「宮廷の喜び」（ショイデラクルト）と呼ばれ，「八歳になっても十歳になってもいつも手を繋ぎ合って歩」き，「夜も昼も一緒にいた」ほど仲がよく，ちょうど17歳になったとき父王グリマルトが脳卒中で逝去，その遺体がまだ城内に安置されている夜に，禁断の関係を結んでしまう。（阻止しようと吠える愛犬は喉笛を裂かれる。）関係はその後も続き，やがてジビュラは身ごもる。

ちなみに，この物語の語り手はアイルランド人クレメンス（最初の名前はモルホルト）というベネディクト派の僧職で，母国のクロンマクノイス修道院から派遣された人物という設定になっている。

さて，アイルランド演劇作品で，双生児が登場するものを調べたところ，ファーカー（George Farquhar, 1677-1707）の『宿敵の双子』（*The Twin Rivals*, 1702）が見つかった。兄ヘルメス・ウッドビー（Elder Wouldbe [Hermes]）と，傴僂（せむし）の弟ベンジャミン（Younger Wouldbe [Benjamin]）が登場するこの作品は，文学辞典では「失敗作」[45]との評価を受け，上演前から攻撃を浴びたせいで初演の入りも疎ら[46]なうえに，厄介な問題点[47]を抱えたこの作品は，必ずしも双子演劇の代表作とは言えないかも知れない。

カーの戯曲にはベルモント（Belmont）川が登場する。オファリー州の地図を眺める

と，北東部をシャノン川の支流ブロスナ川（River Brosna）が大運河（Grand Canal）に沿う形で東西に流れているが，このブロスナ川のほとりにベルマウント（Bell-mount）なる集落がある。ここからカーが川の名前の発想を得た可能性もあるだろう。もちろん，カーが学校で習った最初のシェイクスピア作品が『ヴェニスの商人』だったことの影響は大きいだろうが。

⑦『猫ヶ沼のほとりで』（*By the Bog of Cats*）（紀要32号拙論参照）

追記

著者カーの名前について「車」を意味するアイルランド語の語源などを記述したが，英語自体に「沼地，湿原；湿原の林，（特に）ハンノキの林」（『リーダーズ英和辞典』）の語義があることを追記する。マリーナはラテン語で「海の」を意味するから，マリーナ・カーの語感は，「沼田海乃」「沼澤洋子」といったところか。

わが国では『ザ・マイ』がカーの戯曲としては初上演されたが，韓国ではこの『猫ヶ沼のほとりで』が，2005年11月，最初の上演作品となった。[48)]

⑧『ラフタリーの丘で』（*On Raftery's Hill*）2幕

マリーナ・カーの過半数（6戯曲）は，首都ダブリンのアビー劇場およびその併設ピーコック劇場で初演されているが，本作はアイルランド西部のゴールウェイにあるタウン・ホール劇場で初演された。座席数393のこじんまりとしたこの劇場は，マクドナのコネマラ3部作（『コネマラの頭蓋骨』『リーナン村のミス・コン女王』『孤独な西部』）の初演劇場でもあり，地元ゴールウェイのドルイド劇団と英国のロイヤル・コート劇場が共同制作の形で上演にあたった。

場面はラフタリー家の台所。時は現在。

第1幕　庭へと通じる下手の戸口で次女（とおぼしき）ソレル（Sorrel[49)] Raftery[50)]）がフィドルの調べに耳を傾けている。弾いているのは長男デッド（Ded[51)] Raftery）だが，彼は父親が怖くてなかなか入ろうとはしない。父親の留守を確認してようやく登場したデッドは，肩幅の広い30代半ばの男で，長髪で髭面，ゴム長靴を履き，体中に牛糞がつき，髪には藁がついている。長女ダイナ（Dinah[52)] Raftery）が食事[53)]を運んでテーブルに置くが，デッドは床に置いてしか食べず，怯えた鳥のように戸口に目をやりながら，手づかみで慌てて貪り，ソレルから貰った煙草をふかす。その浅ましい様をダイナは耐えがたく見つめる。ソレルが恋人のダラ（Dara Mood）から土産に預かった煙草（「ウッドバイン」[54)]）を渡そうとするが，牛舎では禁煙，と父親から厳命されているデッドは受け取らない。彼は牛舎で寝泊りしており，父親が生きている間は母屋で暮らさない，と言って退場。

祖母シャロウム（Shalome[55] Raftery）登場。寝間着姿に麦藁帽子，スーツケースと花束を抱えている。口達者だが，すこし認知症気味で，ときおり正気を取り戻す。シャロウムは花束を階段や台所に撒き，近傍の土地の地名[56]を並べ上げて別れを告げ，彼女の父親のいるキニガー（Kinneygar）に旅立つと，語る。さらに，ソレルの母親（すなわちシャロウムにとっては嫁・義娘）は立派な女性で，嫁いだころには盛大な宴を催したが，他人が楽しむのが嫌な性格の父親（すなわちシャロウムの息子・レッド）はそれに待ったをかけたのだという。（こうした性格は，「毒舌の名人」シャロウムの父親譲りらしい。）シャロウムは，愛してもいない男ブライアン・ラフタリー（Brian Raftery）に嫁いだのだが，彼女の父親はそれを知ってシャロウムと絶縁し，手紙も読まずに送り返してきたのだという。冷たい仕打ちの訳を問いただすためにも，父親の元へ出かけると繰り返すシャロウムを座らせ，脚を揉んであげ，ジャム・パンを食べさせるダイナ。

シャロウムは，昔3歳のころ暮らしていたインドでゴリラを連れてきた老人に会い，ゴリラに我が子のように気に入られ，高いオレンジの木の上まで抱きかかえられ，怯える母親らにオレンジの花びらを無邪気に投げた想い出を懐かしく語る。その年の夏の終りにシャロウムの母親は亡くなり，インドを離れてキニガーに戻ってきたのだと言う。さらに，14歳のとき，ダブリンの高級ホテル，グレシャム・ホテル（Gresham Hotel[57]）でドイツ人将校に求婚されたこともあり，世が世ならいまごろはバイエルン（Bavaria）にいて，ドラキュラに会っていたかもしれないのに，大人しくしていた報いでこの有様だ，自分の人生が始まるのを待ちつづけ，なぜだかその人生は始まらなかった，と嘆く。ダイナはシャロウムを階上の寝室へと連れて行く。

60代後半の押し出しの強い父親レッド・ラフタリー（Red [Redmond] Raftery）が，狩猟仲間で同年輩のアイザック・ダン[58]（Isaac Dunn）とともに帰宅する。レッドは首に，仕留めた野ウサギを2羽巻きつけている。牛糞の臭いでデッドが来ていたことを嗅ぎ取るレッド。野ウサギの皮を剝ぎ，内臓を抜いて朝食のスープを拵えるように彼はソレルに命じる。野ウサギを殺すのは不吉[59]だとソレルが嫌がっても，迷信（Auld wives' tales [19]）だと一蹴するレッド。野ウサギの巣を襲って子ウサギ7羽を絞め殺す残忍さには，アイザックでさえ，フェアでない狩りをする，と呆れている。

前もってアイザックを食事に連れてくる旨を伝えておいたにも関わらず，ダイナがすっかり失念して，客人に出す料理が支度されていないと知ると，レッドは，貧乏暮らしをしているという噂を広めてわしの名を汚したいのか，とダイナを罵倒する。

戸外からデッドが奏でるフィドルの音が響くと，300エーカー（約36,700坪，122町）もの広大な美田がありながら，頼みとする一人息子は西も東も分からぬウスノロで，日差しに揺れる大麦[60]相手に話しかけ，キスするところを見かけた，と嘆く。

20代の青年ダラ・ムード（Dara Mood）が登場。10月初めだというのに厳寒を予感させる天候だと挨拶し，風下の谷へ遺骸の悪臭が漂っていると苦情を述べるが，レッドは取り合わない。飼っている愛猫ロウズィ[61]（Rosie）の様子を聞かれたアイザックは，オペレッタのプリマ・ドンナのように気難しくて，昨晩などは飼い主である自分のベッドを占領した挙句に，床で寝ているアイザックの防寒用ナイト・キャップまで要求する始末で，女房のお古のスカーフを頭に巻いてやって，やっと眠りに落ちた，と語り，古代エジプト人の風習に

倣って，この16歳半[62]の老猫を同じ墓に埋葬するように遺言状に書き留めてあること，ロウズィの腎臓は摘出されて，「エレファント・マン[63]」(the Elephant Man [22]) と同じ「パジキンズ病[64]」(Padgkins disase [22]) に罹って，鳥篭のように骨が外側へ変形成長している，のだという。

ダラは谷の地域で大騒ぎとなっている不祥事に話題を変える。ブロウフィ[65]の娘セアラ (Sarah Brophy) が先週赤ん坊を死産したが，昨夜遅く彼女はクロンルーン[66] (Clonloon) 墓地に埋葬されたその赤ん坊の遺体を掘り起こし，棺に座って遺体に授乳している現場を発見され，遺体をいっかな離そうとはしないので自宅へ連れ帰り，遺体と添い寝させていたところ，突然発作を起こしてセアラ自身も亡くなったという出来事である。しかも，この赤ん坊の父親は，彼女が交際していた青年ゲリティ (Gerrity) ではなく，実の父親であることが当人の口からの告白によって明らかになった，とダラは明かす。父親は自殺の恐れがあるため拘禁服を着せられて施設に収容されているという。

この話をレッドはでっち上げとして信じようとはせず，人の評判を貶めるものだと反論するが，ソレルとダラの交際には前向きで，若い者同士で楽しく過ごせ，と言われたダラとソレルは退場。

アイザックはレッドに，ダイナにきつく当たりすぎると咎めるが，甘やかせばエプロン，さらにはブラまではめて女のように家事労働に従事させられる身になる，と反論し，気分を害したままアイザックも退場。

しばらく酒を飲み，レッドは階上のダイナに相手をするように陽気に歌[67]を歌って呼びかけるが，ダイナは応じない。再びデッドのフィドルの音が聞こえ，今度はデッドを呼びつける。デッドは怯えて俯いたまま，毛布にくるまって登場。

嘘をついたせいで精神病院で舌を詰まらせ窒息死した男の話を持ち出した後，真夜中に母屋に来て父親のウィスキーを盗み飲み，牛小屋で煙草を吹かしているとすれば，それはお前が獣ではなく人間である証しだから自分は嬉しい，とレッドが思いがけないことを言い出すので，デッドは当惑する。きちんと規則を決めてたびたび変えないで欲しい，死んだ母さんの待つ天国に自分も行きたい，とデッドは泣き出し，蓄音機や新品のフィドル，土地をやろう，という申し出にも，ただ，牛小屋に戻りたい，と繰り返すデッド。我慢がならなくなって，レッドは息子を追い返す。

シャロウムが再び，寝間着姿にスーツケースで登場し，戸口へ向かう。彼女はレッドに，イエズス会の学校に入れて教育を受けさせたかったが，無学で粗野な亡夫が許さなかったこと，30年間に及ぶ結婚生活でただの１度も亡夫に肌を触れさせず，セックスレスの関係を貫いたこと，レッドの実の父親はハンサムで茶色の瞳をした，ヨークシャー出身のイングランド人陸軍大尉である，と語るが，レッドは信じない。シャロウムは人体の無様さを呪い，お前は望んで拵えた息子ではない，と激昂して，戸外へ出ていく。

階上からダイナが寝間着姿で降りてきて，レッドの酒をあおり，肩が猫背で身のこなしもぎくしゃくした老いぼれに父親がなったと悪口を言い，自分の人生には春も夏もなく，秋ばかり，このままこの丘で死んでいく定めだ，と嘆く。ダイナは亡き母親について，覚えているのは黙りこくって頭痛持ちだったことだけで，世間では天使と評判だったが，地獄の中庭で串刺しのイノシシのように焼かれればいい，と悪態をつき，自分たちは，服を着て人間のふりをしているゴリラ[68]なのだ，と自虐的になる。町に出かけて服や本を買ったり美容院

で髪のカットを勧めるレッドに，父親からじろじろ厭らしい目で眺められるだけだし，移動図書館の貸し本で十分，と突き放すダイナ。彼女は階段で立ち止まり，ソレルに手を出さないように釘を刺す。レッドは確約する。

シャロウムが戻って来る。彼女は暗闇の豚小屋で転び，体中，牛糞だらけ。汚れた顔と手を布巾で拭いてやるレッドに，亡き夫の話をシャロウムは語りだす。褒めるわけではないが，少なくとも今のように悪臭を放つ死骸などなく，亡夫は農場を清潔に維持し，庭で食事ができるほどだったこと，自分が邪険に扱うほど，大きな哀しい目で溝に突っ立って虚空を見つめていた，と。亡き嫁を彼女が褒めると，始終持病の偏頭痛を訴えていた狂人だった，とレッドは非難する。牛や狂犬なら安楽死させられるが，人間の女には昨今手出しが出来ない，と脅して，嫌がるシャロウムを寝室に下がらせようとする。自分たち母と子は，愚かな法には縛られない，野放しの巨大な化け物だった，と語るレッドに，自分は別だ，とシャロウム。二人は階上へ退場。

しばらくしてソレルとダラが登場。抱擁して長く甘いキスを交わす。数ヶ月後に結婚し，干し草の山や搾乳室，墓地での密会はおさらば，とダラ。［ここでレッドが踊り場に戻り，以下の一部始終は立ち聞き・盗み見される。］悪臭に閉口するダラは，レッドの所有地の半分を手持ちの貯蓄した金で，残りの半分を銀行融資で買い取りたいと語る。ダラの父親は妻とはろくに口もきかず，練乳を飲んでは溜息をつくような不機嫌な男で，彼はむしろお母さんっ子(molly cuddle [33])を自認している。彼は半月前に，「異常な激情」(perverted rages [33]) に駆られたレッドが，自分の父親や妖精の砦について意味不明の言葉を喚きつつ，擦り寄ってきた牝牛の乳房をナイフで切り落とす凄惨な光景を目撃したことを打ち明け，早く無事にソレルを自分の元に迎え入れるまで心配でならないこと，自分の悪口を言うレッドを信用しないように訴える。ソレルは，いがみ合うダラとレッドの板挟みなって調停役をするのはもううんざりで，生(お)い先短い父親がいなくなれば土地を買って楽しく暮らせるのだから，もう父親の話はしないように諭す。明日会う約束とキスを交わして，ダラは立ち去る。

レッドは降りてきて折畳み式ナイフで爪を切りつつ，牝牛をナイフで殺傷した話はでたらめだ，と主張し，ダラとソレルが彼の土地を奪うために毒殺を画策しかねない，と被害妄想を膨らませる。彼は野ウサギの内臓をえぐりだす方法を教えてやる，とソレルの腕を押さえつけ，まずゆっくりと皮を剝ぐのだ，とナイフでソレルの服を切り裂き始める。ソレルはダイナやデッド，シャロウムの名を呼んで助けを求めるが，誰も来ないさ，とレッドは狂ったように笑う。ソレルは声が出なくなって身悶えし，服は切り裂かれて，スリップ姿になる。いつも処女マリアのようなふりをしやがって，とレッドはソレルを食卓に押しのせ，スリップの肩紐を切り，こんな風に野ウサギの内臓はえぐるんだぜ，とナイフを食卓に突き立てる。暗転。

第2幕　3週間後の夜。食卓についているソレルに，デッドが顔を見せ，煙草をせがむ。一服してすぐまた戻ろうとするデッドに，なぜ助けにきてくれなかったのか，とソレルは問う。彼は明言を避け，自分なら鉄床(かなとこ)で応戦する，と虚勢を張るが，しょせん自分とソレルは家畜で，ダイナが仕切り屋の博労(ばくろう)なのだ，と悪口を言う。

ソレルの花嫁衣裳を手にそのダイナが降りてきて，二人は罵りあいの喧嘩になり，ダイナはデッドを追い払う。試着を拒否してきた花嫁衣裳をソレルにあてがって，やはり裾丈が長すぎた，とダイナは苛立ち，ソレルは衣装を投げ捨てる。寸法直しに戻ろうとするダイナに，ソレルはずっと心に抱いてきた疑念——(年齢差が21歳もあり，母親のように世話してくれてきた)姉ダイナは，実は自分の母親なのではないか，という疑念——をぶつける。ソレル出産後に母親は亡くなった，とダイナはこれを言下に否定し，髪飾りにはソレルの好きな矢車草(cornflowers)，祭壇には沢山の百合を手配し，レッドが気前よくホテルでの結婚披露宴も認めてくれているし，日頃は豚小屋暮らしのデッドまでもが出席するから，まったく心配には及ばない，とソレルを元気づける。なぜ独身のままなのか，とのソレルの問いには，求婚者もいなかったし，自分以外にはデッドやソレルの面倒を見る者がいなかったから，と答える。亡き母親の面影を問うソレルに，ソレルに似て美人だったけど，病弱で布巾を頭にあてて裏座敷で臥せっていた，我がままでもあり，デッドを溺愛していたけれど，自分は無視されていたから好きではなく，むしろ父親レッドの方が肩車や干し草遊び，魚釣りなど自分とよく遊び相手になってくれたし，様々な樹木の名前を教えてくれ，幼いころ自分が淹れたお茶をこの界隈で最高のお茶だと誉めそやして，幼な心を持ち上げてくれた，としみじみと回想し，階上へ退場。

レッドとアイザックが狩猟姿で登場。風邪は治ったのか，とうそぶくレッドにソレルは冷淡に対応し，酒の相手をするように言われても無視して，階上へ退場。

二人は，天候の話題(積雪がひどくて道路が封鎖され，女房の葬儀が3日も遅れた1981年の冬が一番厳しかった，とアイザックは回想）に始まり，レッドの父親が冬には愛車モリス・マイナー（Morris Minor）にこもって何時間もぼんやりと過ごしていたこと，オファリー州出身の最高のハーリング選手だった彼が，ある日曜日に試合に現れなかったため，彼の妻子にまつわるひどい噂話が流されたことなどを語り合う。ブロウフィが除草剤を飲んで自殺を図ったことにアイザックが触れると，たとえ娘に手をかけたのが事実でも，なにも自殺するほどのことではない，とレッド。キリスト教信者の良識のかけらが残っていた証しであり，いくら寛容な神でも実の娘に手を出すような者は許さないだろうし，娘フィロミナに自分ならそんな真似は出来ない，とアイザックが言えば，どんな男もあんたの娘とはやりたかないさ，とレッドはふざける。ブロウフィは化け物だ，となおも真顔で嫌悪するアイザックに，そうした化け物を生み出したのは神であり，天国から追放する喜びのためだけに堕天使ルーシファー（Lucifer）を神は作り出した，とレッドは反論する。ゼウス（Zeus）が姉ヘラ（Hera）と結婚して子どもたちをもうけ，彼らが近親相姦の営みに明け暮れていたように，ギリシア神話ではまた違った世界観がある，とアイザック。降りてきたダイナに，飼い猫ロウズィは昨夜3時5分に永眠したこと，彼女の皮でチョッキを作ろうと思っている，とアイザックは告げて，退場。

ダイナは，ソレルが泣き通しで食事もせず，何度も風呂に入ることを伝え，ソレルに近づかないという約束を破って，3週間たっても消えない傷跡を残したことを激しく責め立て，18年間も鷹のように目を光らせて守ってきたのに，本に描かれた悪魔のように襲いかかる機会を狙っていたレッドに気づかなかったソレルの側の落ち度も非難する。なおも否認を続けるレッドの首にダイナはつかみかかり，黒い奥歯や難聴のレッドは老齢年金を貰えるほどの老いぼれであり，もうソレルには絶対に手出ししないで，と迫る。レッドは，我がまま

娘を懲らしめた躾だ，とうそぶき，10ポンド紙幣の束をダイナに手渡して懐柔をはかる。汚い金で何でも解決できると思っている，と皮肉りながらも，ダイナは金を受け取る。

ソレルが降りてくる。昨夜同様，二度目の入浴に向かうソレルに，過ぎたことは水に流し，ソレルが謝れば（！）もうこの話は一件落着にしてもよい，幽霊じみた演技や表裏のある言動や自分への非難はもううんざりだ，と盗っ人猛々しくも居直るレッド。ダイナも無知を装って，父親との和解を勧める。ソレルは無視して，浴室へ向かう。レッドはソレルが実情を世間にばらすのではと不安がり，農場をきれいにして春の耕作の準備にかかろう，と切り出す。

ドアを開けて汚れた衣服のシャロウムが入りかけ，家を間違えた，と引き返そうとするのをダイナは引き入れる。シャロウムはキニガーの地名を口にするが，実はそこは30キロほど離れた隣町であり，その気になればたやすく行けるはずなのにわざと自分を困らせているのだ，とダイナ。父親にリリパット湖（Lilliput Lake）に舟遊びによく連れて行って貰った，とシャロウムの昔話が始まったとき，デッドの様子を戸口から見ていたレッドは，デッドが発作を起こしたのに気づき，飛び出す。ダイナも続く。

湖面をトンボが飛び交い，イグサの間でアオサギが餌をつつくなか，やさしく自分の名前を呼ぶ父親の回想にシャロウムだけが陶然と浸っているなか，暴れ叫ぶデッドをレッドとダイナが引きずって連れてくる。レッドは彼を床にねかせたまま首を足で押さえつけて，薬の錠剤を服用しなかったことを咎めつつも，なんとか落ち着かせようとする。レッドの指示で牛小屋からロープを取ってきたダイナとともに，レッドはデッドを縛り上げる。いざというときに［＝ソレルが襲われたときに］寝ていたシャロウムを非難したあと，デッドは錯乱状態になってのたうちながら，以下のような話を叫ぶ――＜ダイナを連れて牛小屋に行くように父さんが言った，ダイナは血だらけでどうしてよいか分からなかったが，仔を産もうとしている（calving）だけだ，と父さんは言い，俺の言うとおりにしないと金玉を切り取るぞ，と僕を殴った，そのあと父さんは牛小屋にまたやって来て，［新生児の］ソレルを母さんのところへ連れて行った，ぼくはダイナになんにもしてないのに，僕のせいだと思った母さんはそれから二度と僕と口をきかなかった…。＞　僕がばらしたことは父さんには言わないで，とデッドは父親本人に話しかける。麦藁の下に隠していた錠剤を見つけたダイナは，酒とともにデッドに飲ませる。

ようやく落ち着いてきたデッドのロープをレッドが解こうとすると，縛られていたことに初めて気づいたデッドは怯えて抵抗するが，やがておとなしく，ダイナに伴われて牛小屋へと向かう。父さんが牛小屋では禁煙だ，と言っているから，と煙草を断りながら。

ドアにノックがあり，ダラが登場。［牛小屋からはデッドのフィドルの音。］シャロウムは，私たち一族は変わり者ばかりだから，生涯の伴侶には不向き，とソレルとの結婚に暗に異を唱える。レッドに呼ばれてソレルが降りてくる。レッドはダラに，50エーカーの土地の権利書と２万ポンド（約400万円）の持参金を提示する。ダイナは空腹を訴えるシャロウムを階上へ連れて行く。

自己所有地50エーカーと合わせてこれで100エーカーの大規模農場主となるのだが，相続資格のあるソレルが受け取るのは構わないが，自分は無作法な施し物は受け取らない，とダラはこの申し出を拒絶する。これは

自分のものであり，高価な代償を払った，としてソレルは権利書と金をつかんで，二階へ駆け上がる。

レッドはソレルの貪欲さを嘲り，女は背中から刺してくるような卑怯者だから用心しろ，と忠告する。かつてのように不法侵入者を銃で撃つ元気もないが，大飢饉の折にはラフタリーの丘のお陰でダラのような小作農は食いつないだし，1923年には50エーカーの荒地を売ってやったとレッドは恩に着せる。あんたの呪われた土地に僕の鋤は打ち込まない，と拒否するダラに，その逆はあるかもな，と意味深長な捨て台詞を残して，狩猟支度を整えたレッドは退場。

ダラは二階からソレルを呼び寄せ，レッドには我慢がならない，と訴える。するとソレルは，彼の血が流れている自分に我慢がならないのと同じだと怒り出し，愚かなプライドのせいでせっかくの土地と持参金を無下にしたダラを非難し，ついダラのことを'scrubber'（「雑種（どこの馬の骨だか分からない奴）」あるいは，「あくせく掃除をする人間（水呑百姓）」か）呼ばわりしてしまう。しかし，彼の皮肉にいっそう逆上し，父親は態度こそ粗暴だが少しも悪気はなく，むしろ内面は善良であること，身内の悪口を言われれば誰でも嫌である，とレッドを擁護する。そんなに良い人なら結婚相手は父親にすべきだな，と言うダラの不用意な売り言葉に，世界が闇のように暗くなるのを感じたソレルは，婚約の破棄と絶交を宣言して，階上へ退場。

なりゆきに当惑するダラに，入れ替わりに降りてきて事情を知らないダイナは，ハンサムなご主人がいるのだからソレルは大丈夫，と慰め，それにひきかえ自分には前途がない，と愚痴を言う。かつてダラの兄ジミー（Jimmy）とも交際していたダイナだが，断腸の思いでジミーと別れたことを振り返る。ジミーには来年6月第3子が誕生予定と聞かされ，世が世であれば，ジミーと結ばれていたかもしれない，と洩らすダイナ。ソレルは元気になるから，数週間の冷却期間をおいて訪ねてくるようにとの彼女の忠告を受けて，ダラは退場。

ダイナは食卓に座る。階上から，ソレルの花嫁衣裳を着てシャロウムが登場。実家のキニガーを花嫁衣裳で出立したのだから，花嫁衣裳で戻らなくては，と。

続いて降りてきたソレルは，ダラとの婚約は破棄し，もう花嫁衣裳は要らないから彼女に着させてあげて，とダイナに告げる。ダイナは18年間自分が警戒してきたというのに，ソレルの用心不足でこんな事態を招いた，と彼女の落ち度を責め，自分の場合は，12歳のときに，夫と同衾したくない母親から，父親（＝レッド）といっしょに寝るように促されたほど，無防備な環境だったのだと打ち明ける。真っ暗闇のなか，言葉も交わさずに，禁じられた営みはそれ以降もときおり続いてきて，自分もレッドもこうした禁断の関係を打ち切りたいと願っているのだが，＜ルールを決める前に＞なにかひどいゲームに興じている子どもたちさながら，それができないでいる，しかし自分と同じ轍を踏まず，ダラと結婚をしてこの丘を去り，嘘をつくのではなく，「考えていることと反対のことを言う」という世間並みの常識を実践すれば乗り切れる話だ，少なくとも，事実を世間に暴露して立派な家名を貶めることのないように，とソレルに諭す。私たちは木にぶらさがっているゴリラの群れだわ，とソレルは反論する。

泥だらけの花嫁衣裳のシャロウムが，レッドの腕につかまって登場。父親の話を繰り返すシャロウムに，12，3歳のとき親父の葬式に連れて行ったのはシャロウム自身であり，そのとき，お父さんと瓜二つね，と会葬の婦人に言われた，とレッドは笑って思い出す。しかしシャロウムは，父親は死後硬直（rigor mortis）を

装っているだけで，柩のなかで癇癪をおこして蓋を引っ掻いている，と取り合わない。レッドは珍しく殺さずに仕留めた鳥１羽を見せ，ダラを説得して結婚の話をつけるようにソレルに求める。ソレルは，彼のことはもうすっかりかたがついた，と答え，レッドは納得する。

レッドは酒を注ぎ，どっちみち台無しになったのだから，と花嫁衣裳を引き裂いて雑巾のようにして，銃を磨き始める。デッドのフィドルの音。溶暗し，一気に暗転。

登場人物の一覧表で，人間関係や年齢を明示してきたマリーナ・カーが，この作品では単に名前の羅列に留めているのは，梗概で明らかなように，ダイナとソレルが年の離れた姉妹ではなく，実は母子であることを最初のうちは隠す必要があったからである。レッドとダイナは父娘の近親相姦を結んだことが暴露され，そうなると，レッドがソレルを陵辱するのは，第１幕まで大部分の読者・観客が思い込んでいただろう，父娘の近親相姦ではなく，(ある観点に立てば)祖父と孫娘の近親相姦という，いっそう驚愕的な関係になる。想像をさらに逞しゅうすれば，レッド自身が，エレクトラ・コンプレックスのシャロウムとその父親の近親相姦の息子である疑念も拭い去れない。

この第１幕最後の陵辱シーンはおそらくアイルランド演劇史上でかつて例をみないほどの暴力的性的描写であろう。ドレスをナイフで切り裂き，スリップ１枚の姿になった18歳の娘をテーブルの上で乱暴することを暗示して終わる結末は，猟奇的ですら，ある。振り返れば，1907年にはシングの『西の国の伊達男』に対してアビー劇場の観客が騒いだとき，そのきっかけのひとつは主人公クリスティの第３幕の台詞「ここから東の国の果てまで，選りぬきの美女を肌着一枚でずらりと並べてみせたところで，おれの心は動きはしない[69]」だったと言われている。1926年にオケイシーの『鋤と星』でやはり観客が騒動を起こし，警官が動員されたのは，ひとつには，登場人物の売春婦の台詞が卑猥な売春行為を暗示するものだったことによる[70]。およそ百年前には＜下着姿の美女＞という単なる台詞だけで不道徳とされ，80年前には性行為を職業とする女性の言動に激しい憤りを表明したアイルランドの観客たちは，2000年５月には下着姿に無理矢理にさせられ，「実の父親」から性的暴行を受ける場面を目の当たりにしても，抗議や騒ぎをおこさないほど性表現に寛容になったのだろうか。アメリカ演劇やヨーロッパ演劇なら過激な性描写の演出があっても筆者は別段驚かないが，アイルランド演劇で，しかも地方劇場でこうした大胆な場面が舞台で提示されたことに筆者は唖然としている。

標題の「ラフタリーの丘」は，これまでの作品に見られたような土地，『ザ・マイ』の梟ヶ湖，『猫ヶ沼のほとりで』の猫ヶ沼，『ポーシャ・コフラン』のベルモント川とは異質である。後者が文字通りに，水を湛えた潤いに富む環境であるのに対し，水と

は縁遠い乾いた小高い丘は，あたり一帯に放置され腐臭を放つ家畜の死骸と相俟って，生気のない曠野と化している。マイが新居を構えて定住し，ヘスターやポーシャが片時もそこから離れようとしないほど愛着を抱いた水辺に対し，シャロウムやダイナ，ソレルたち女性は，そこから逃げ出そうと懸命にもがきながらも，この丘に縛りつけられている。よりいっそう悪魔的な呪縛の力がこの丘には働いているといえる。自然や神話にちなむ梟ヶ湖や猫ヶ沼，ベルモント川はこれから先も同じ固有名詞で呼ばれ続けるであろうが，「ラフタリーの丘」は，テキストでは「丘」とだけ呼ばれることが多いように，単に土地所有者を明示する社会的呼称であり，将来においてこの土地をデッドやダイナら，子どもたちが守り，継承していかなければ，まったく別の個人の名前が冠せられることだろう。

最近刊行された『ケンブリッジ版アイルランド文学史』の第10章「英語による現代劇　1940－2000」のなかで，UCDのロウチ教授（Anthony Roche）はこの作品を，これまで順調に進んできたカーの執筆経歴における「躓(つまず)き・踏み損ない」（misstep）と評している。近親相姦という主題が当然要求する繊細な取り扱いをせずに，暴力を野蛮な形のまま舞台で描写することでメロドラマに陥っていると，教授は考えるからである。[71]

イギリス公演時に批評家たちから，強姦場面を描くのみならず，強姦者の父親を非難していない，との批判をこの作品は一斉に浴びた。それに対してカーは，「道徳警察（取り締まり）は芸術の死になります。政治的正確さが私たちの文学や詩を破壊しています。道徳的に有利な立場のための場所はありますが，それは芸術ではありません。芝居を書いている時に，思想警察に肩越しに覗かせてはなりません。登場人物には言いたいことを言わせねばなりません。芝居は想像力で書くものであって，頭で書くのではありません」[72]と答えている。

近親相姦を擁護する理論的根拠は，（レッド本人でなく，友人の）アイザックが代弁するように，ギリシアの神々の間ではそれが常態だったとする主張である。ギリシア神話[73]では，すべての始原にまずカオス（混沌）があり，カオスから母なる神ガイア（大地），ガイアからウラノス（天空）が誕生する。ところが母ガイアは息子ウラノスと母子相姦し，レアやクロノスを生む。さらに，姉レアと弟クロノスは姉弟相姦[74]し，ヘラやデメテル，ゼウスなどの子どもたちをもうける。アイザックが言及するように，この末弟ゼウスは姉ヘラと再び姉弟相姦する。ゼウスは別の姉デメテルとも姉弟相姦し，（近親相姦とは呼べないが）従姉妹のレトとメティス，従姉妹の子のマイアとも関係し，人間の女性ダナエとその孫娘アルクメネ，そしてセメレとも交わってヘラクレスとディオニュソスを誕生させる。

こうしてみると確かに近親相姦の乱脈な連鎖がギリシアの神々の性的特徴として認められ，アイザックの主張に正当性の根拠を提供しているように思われる。しかし，レッドの犯した近親相姦は実の長女ダイナとその娘（つまり，ある意味では孫）ソレルとの間で結ばれたものであり，ゼウスのように実姉ヘラやデメテルとの相姦ではない。ゼウスが自分の娘，そしてその直系の娘と関係をもったという事実が示されない限り，アイザックは，レッドの行為の類型をギリシア神話に追確認したことにはならないはずである。

⑨『エアリアル』（*Ariel*）3幕

第1幕　アイルランド中部のオファリー州と思われる町のフィッツジェラルド（Fitzgerald）家のダイニング・ルーム。長女エアリアル（Ariel）の16歳の誕生日パーティを両親――父親ファーモイ（Fermoy），母親フランシス（Frances）――，12歳の次女エレイン（Elaine），10歳の長男スティーヴン（Stephen），ファーモイの兄で修道士のボニファス[75]（Boniface），ファーモイの伯母セアラ（Sarah）が祝っている場面から始まる。

ファーモイはエアリアルに新車をプレゼントし，せっかくセアラが昨晩焼いたケーキに手もつけないで，早速試乗[76]に母親や妹弟とエアリアルは出て行く。甘い父親だと自戒するファーモイ。兄のボニファスは修道院生活の苦労を物語る。60歳未満の修道士は彼だけで，先輩の修道士はオムツをつけた認知症の要介護老人ばかりで，想像上の愛馬と寝食を共にしている者もいれば，彼を「母ちゃん」と呼ぶつわものもいる。そんな介護施設にも20年来の議員ハナフィン（Hannafin）は選挙活動に現れているという。前回の選挙に出馬したファーモイはこのハナフィンにわずか4票差で敗れ，今回は雪辱戦を挑んでいる。彼はアレクサンダー大王[77]やナポレオン，シーザーと会食する縁起の良い夢をみたばかりか，神と直に話をしたのだという。兄弟はこのあと，それぞれが信じる神について互いに主張しあう。

ファーモイの神は，七つの月を数珠のように掌で操り，眼は黒曜石，皮膚はトルコ石，真っ赤な口の美しい神で，うたた寝から目覚めると二千年が過ぎていたような，時間を超越した若い神である。一方，ボニファスの信じる神はブロッコリ好きでテント暮らしの老人である。ファーモイは，現代の潮流に異を唱え，平等賃金や職場内託児所，北アイルランド・和平プロセス，貧困者や障害者，難民，ティンカー，教師，燭台職人への支援――これらいっさいを，古代スパルタ[78]の顰に倣って否定し，罪の意識や哀しみのない新しい宗教をこの世にもたらすのだと訴える。そのために自分がなすべきことはただひとつ，血による神への犠牲であると言う。ボニファスはこの血の犠牲を異教の儀式ないし邪悪なものと感じ，神はそうした取引は行わない，と戒める。

ファーモイは選挙で勝つためには入院患者や養老院などの施設収容者からの得票が必要であるとして，保健局担当官宛ての手紙の文案を考えてほしい，とボニファスに依頼する。現職議員同様に，福祉施設への戸別訪問を可能にするために，担当官の弱み（妻への暴力，娘の盲腸切除手術などに絡む不正の有無）を聞き出そ

うとするが，決定的なものはない。彼はセアラ伯母のケーキを気紛れに拳でつぶすが，（立ち聞きしていたのか）セアラがちょうどやってきて，対立候補のハナフィンが優勢との評判だと伝える。ファーモイとボニファス，退場。

入れ替わりに，携帯電話で女友だちのステファニー[79]（Stephanie）と通話しながらエアリアルが登場。遊びに誘われるが，遅れて戻ってきた母親フランシスから夜間外出しないように注意され，おとなしく従う。フランシスのおっぱいを求めるスティーヴンは，父親に言いつけると言われて，母親に凭れて寝そべることで妥協する。最後に入ってきたエレインは，母親が弟を甘やかしていると非難し，にらみつける。その眼が祖母譲りだと口を挟んだセアラに，その祖母は祖父の手で殺されて，丸石を入れた袋に詰められてコーラ湖（Cuura Lake）の底に沈められた，しかもその凶行が行われていたとき，祖父のベッドを暖めていたのは他ならぬセアラだったはずだ（すなわち，祖母の姉妹であるセアラは，義理のきょうだい同士で近親相姦していたことを示唆），とエレインは詰問する。フランシスはエレインに暴言の謝罪を命じるが，彼女は開き直り，謝りもせずに出て行く。

フランシスはエレインから嫌われているのは，ファーモイと再婚する前の連れ子ジェイムズ（James）の死に責任があると非難しているからでは，と思いつめている。ファーモイとの新婚旅行に5歳の連れ子ジェイムズを同伴せずに親類に預けていたところ，ハーリング競技のスティックの打撃で彼は事故死したのだった。彼女は遺児と亡夫の写真をペンダントに収めて肌身から離さず，しきりに眺めている。セアラは慰めの言葉をかけて退場。

フランシスは膝枕で眠っているスティーヴンとジェイムズの遺影とを見比べる。瞳は二人とも母親似だが，額に懸かるほど長い，濃い藍色の巻き毛はジェイムズならではの美点だった，といとおしく振り返るフランシス。

ボニファスが登場し，寝た子が一番可愛いなあ，と声をかけるが，死んだ子の方がもっと可愛い，と彼女は答える。今回の選挙で，もし夫ファーモイが落選すれば，自分が責められるから，できる限りの応援を頼むフランシスに，妻殺しを犯した父親同様に弟ファーモイには暴君の側面があり，（触法年齢未満の）7歳の子どもだったとはいえ，母親を押さえつけて殺人幇助を行ったことが弟の世界観に悪影響を及ぼしている，とボニファスは憂慮する。妻殺しの原因は，浮気を邪推したためで，実際には妻はサン・ジョヴァンニのピオ神父[80]（Padre Pio, 1887-1968）を熱烈に崇拝し，彼の聖痕[81]が飛び散ったブラウスを後生大事にしていただけだった。

ファーモイが登場。彼は妻フランシスが修道女のようにお堅い女性で，<好きな時にやれる>というだけの理由で結婚したのに，まだ乳歯をはやし乳離れできない末っ子を盾に，性的要求を拒んでいる，と憤懣をぶつける。優しい言葉はおろか，夫婦の会話もない，とフランシスは怒って立ち去りかけるが，ファーモイはペンダントをひったくる。死んだ亭主や子どものことはいい加減に忘れろ，と迫るファーモイに，新婚旅行に連れ子を同伴させなかった夫をなじると，彼はそれを否定し，ペンダントを返さずに，立ち去る。

ボニファスは事情を察して席をはずす。フランシスはスティーヴンを起こし，お休みのキスを与えて，一人

で寝室に行かせる。

エアリエルが戻り，女友だちスティファニーに新車を見せたいから少しの間外出したい，とフランシスにせがみ，彼女は了承する。エアリエル，退場。

ファーモイがCDをかけ，音楽を聞きながら踊りだす。彼はペンダントを妻に返すが，そこには遺児の写真はあるが，前夫チャーリーの写真は抜き取られていた。忘れることも大切だと，彼はフランシスに長い口付けをする。このとき，対立候補のハナフィンが登場し，しばらく夫婦のやりとりを観察する。

ファーモイは，前夫と子どもの死は「運命のなせる業」(strokes a destiny [31]) であり，自分が首相に就任したら，セックス省を新設してフランシスをその初代大臣に任命し，アイルランド社会の弊害であるセックス不足を解消するのだ，と突飛な話を始める。

そこへハナフィンが出し抜けに割って入り，彼は最新の世論調査結果を知らせるファックスで，自分が大きく水を空けているとして，ファーモイに立候補を撤回するように迫る。フランシスに対しても，ジェイムズの墓の手入れが行き届いてないと皮肉り，いくらセメントと砂利で稼いだ金で，ギリシア式円柱や噴水，獅子像を擁する豪邸を築いても，所詮は人殺しの倅に有権者が国政を委ねるわけがない，と侮辱する。ハナフィンはさらに，いまから記者会見を開いて，ファーモイに関する醜聞を暴露し，明日の朝刊に掲載させる，と脅迫する。ファーモイは，父親の殺人罪，妻との略奪愛再婚のほかに，ボニファスのアル中の経歴，大飢饉時代の曽祖父がわが子の肉を喰った噂話などの出自や血筋はもはや問題ではなく，本人の素養や長所を評価する新しい時代を迎えている，と反論するが，息子は必ず父親の性質を受け継ぐものだ，とハナフィンも譲らない。ハナフィンの家系にも芳しくない経歴はあるし，アスベスト工場の建設や養豚場の資金提供に疑惑があるとするファーモイに，お前のセメントと砂利のビジネスにも不正があるに違いない，とにかく，新聞報道を回避したければ1時間以内に電話連絡しろ，と言い残して立ち去る。

フランシスは落選濃厚の世論調査にすっかり弱気になって，夫に立候補取り消しを促すが，もちろんファーモイはこれを拒否する。フランシスは前夫を裏切ってファーモイと浮気した経緯を蒸し返して，自分は17年間の結婚生活でファーモイを夫としてでなく，子どもたちの父親としか見なしてこなかった，と釘を刺して，退場。

エアリエルが戻る。途中でハナフィンと出くわし，渡すように頼まれたと言って，古い新聞記事をファーモイに手渡す。それは彼の父親が起こした女房殺人事件の裁判を報じるものだった。犯行後，父親は煙草を一服し，子どもだったファーモイを肩車して湖畔の居酒屋に入り，酒を飲んだ後，ファーモイに微笑みながら「もう俺たちは，自首する潮時だ」と囁いたのだという。かつて仔猫を袋詰して水死させる父親の姿を見たこともあり，自分が＜俺たち＞と共犯者扱いされても止むをえないのだ，とファーモイ。

しばらく娘を見つめた後，どこでもいいからドライブに連れて行くように彼はエアリアルに頼む。フランシスはすでに就寝したと聞かされて，彼女は部屋の明かりを消す。グノー (Charles [-François] Gounod, 1818-93) の「死と生」('Mors et Vita') の主題歌[82]が流れ，暗転。

第2幕　引き続き「死と生」の主題歌が流れるが，第1幕から10年が経過している。ファーモイは新聞記者ヴェロニカ[83]（Veronica）からインタヴューを受けている。22歳になっている次女エレインがスーツ姿で立ち，父親の秘書役としてメモを取っている。

ヴェロニカの質問によって明らかにされていく10年間の事実経過は以下のようなものである。ファーモイは選挙で当選を果たし，以後10年間「神の恩寵」のお陰で議席を守ってきた。彼がハナフィンに勝利できたのは，投票日間際にハナフィンの醜聞が暴露されたためで，ハナフィンはそのために自殺を遂げたという。醜聞暴露にファーモイが裏で関与したという噂に関しては，彼は否定した。

その後，3度入閣[84]を果たし，最初の「芸術文化大臣」は僅か1年間だったが，気紛れな芸術家たちとの会話を楽しんだ。次に与野党から経験不足を理由に反対が湧き起こったが，首相の勇断で「財務大臣」に抜擢され，5年半に渡って業績を残した。「国家の財布の役はうんざりだ」という酒に酔っての失言等もあったが。任期半ばでの財務大臣辞意表明は，首相との不和を招いたのみならず，内閣不信任動議につながり，現在のダドリー新首相[85]（Taoiseach, Mr Dudley）はファーモイの傀儡であって，やがて更迭されるだろうという見方があるが，全盛期を過ぎて疲弊した前首相個人を延命させるのではなく，党の命運を尊重した結果である，と彼は弁明する。現在ファーモイは「教育大臣」の任にあり，首相の実権を実質的に握っており，次期首相に野心があると思われている。政治家を志す者として，権力に関心があるのは当然のこと，＜芸術家が権力を愛するように私は権力を愛する＞とナポレオンの言葉をもじって引用する。

彼は，アフリカ西海岸沖の流刑地・セント・ヘレナ（St Helena）島でのナポレオンの遺言のなかで「エジプトでなくアイルランド目指して航海していれば，いまごろイングランドは，そして世界はどこにあるだろうか？」という言葉も引用している。また，昼でなく夜を基準にして時間を測るケルト人の知恵にシーザーが感嘆したことなどを取り上げ，第一原則に立ち帰れ，という信念を明らかにする。この考え方は教育大臣として彼が刊行してきた3冊の白書，とりわけ「神学白書」において，大きな物議を醸している。カトリック教会までもが，ファーモイの唱導する神は異端的であり，原始の野蛮な神であるとの声明を発表しているという。

これに対するファーモイの説明は，イタリアの画家ピエロ・デッラ・フランチェスカ（Piero della Francesca, c.1420-92）による絵画「復活」（'Resurrection'）に描かれたイエス・キリスト像である。キリストは人間のために死んだのでも，人間のために復活したのでもなく，人間によって殺されたのであり，自分自身のために甦ったのだということがこの絵を見れば分かる。キリストの目には許しはなく，裏切りの衝撃と復讐に燃える怒りが込められている。自分は，政治家の職業病とも呼ぶべき，他人から好かれたいという大衆迎合の気持ちは毛頭なく，明確なヴィジョンを抱いて施策を推し進めるのが政治家の責務と考える，と答えるファーモイ。

続いてヴェロニカの質問は，彼の私生活，とくに長女エアリアルの失踪事件に移る。10年前，エアリアルは16歳の誕生日に友だちに新車を見せに出かけたきり，戻ってこず，いまではもう死んだもの確信していると，ファーモイは語る。

ここで一旦インタヴューは打ち切られ，ヴェロニカはカメラマンに撮影完了の確認をとる。一方，ファーモイはエレインに意見を求め，彼女は，権力愛と神の部分はカットし，エアリアルについてはより詳しく情感を

込めるべきだと，論評する。神のカットは認めるけれど，抑制された語り口は適切だし，権力欲を自認する政治家はむしろ新鮮でよい，とヴェロニカは反論し，受け入れられる。ヴェロニカとエレインは退場。

インタヴューを途中から立ち聞きしていたフランシスは，エアリアルの死を断言する夫に苛立ちを見せ，ちょうど今日が彼女の誕生日（かつ命日）に当たり，6時からミサがあることに念を押して退場。

煙草に酒，書類への署名などをしていると，20歳の大学生になっているスティーヴンが喪服姿で登場。学業の様子を訊き，食事に誘うファーモイに，彼はあまり乗り気でない受答えをする。ユリ売りの口上を述べつつ，ボニファスが登場。スティーヴンは挨拶を交わして退場。

ボニファスはアルコール禁断治療も止めて，ふたたび飲酒にのめり込み始めており，手酌でどんどん杯を重ねる。フランシスも加わり，娘を忘れるためのお酒なのに記憶が却って鮮明になる，と嘆く。ボニファスは今朝摘んだばかりのユリ[86]の花を彼女に手渡す。

ファーモイはフランシスに，自分がいないと淋しいか，と問いかけ，恋しいのは想い出だけ，たまに気が向いたときには他の男と寝ている，と彼女は答える。我が家では犬扱い同然だが，外へ出ればぴちぴち美女に囲まれている，と豪語するファーモイに，フランシスは怒って退場。

ボニファスはファーモイがかつて血の犠牲の話をしたことに触れ，この世の中はささやかな慈愛以外には狂気と忘却があるのみ，ということが分からぬか，と酔ってからむ。ファーモイは，手遅れになって気づくのが世の掟，と受け流す。

フランシスが戻り，早く出かける準備をするようにファーモイを急かす。我が家は葬儀場のようだと彼は罵り，年に1回，2時間しかいないくせに，とフランシスはやり返す。

喪服に着替えたエレインが携帯電話を持って登場。ファーモイが受け取って，電話に応答しつつ退場。フランシスは，生きていればエアリアルは26歳，妊娠中には奇形で生まれる悪夢に悩まされたが，無事に五体満足で生まれた，と振り返る。自分のときはどうだったかとエレインが尋ねると，エレイン懐妊時は無性に甜菜と酢が欲しくて，そのためにエレインが辛辣な性格になったのかも，と皮肉る。エアリアルやジェイムズを古手袋や古傘のように忘れ去っていることをフランシスが非難すると，哀しみは中毒と同じで，もうエアリアルは戻ってこないのだから，生きている人間を大事にすべきだと反論するエレイン。エアリアルの死について断定的な口調にフランシスは不審がり，エレインを追及する。

セアラが登場し，昔話を語る。スティーヴンが戻り，5時50分だと告げる。大学で映画学専攻の彼は自主制作映画で賞を獲得したのだが，結婚式当日に新郎が行方不明となり，捜索の結果，フランシスという名の母親のおっぱいを吸っているところを発見されるプロットで，紛れもなく自分へのあてつけである，とフランシスは逆上する。しかし，スティーヴンは，イタリアの新聞で報じられた実話に取材したものだと否定する。

喪服に着替えたファーモイが登場。ミサ終了後も家に残るように申し渡して，フランシスはボニファスやスティーヴンと退場。エレインも遅れて退場。セアラは，ミサ欠席だが，退場。

ファーモイは手鏡を取り出し，自分に呼びかけ，手鏡をしまう。

電話が鳴り，エアリエルの声が響く。(最初のやりとりの後は，彼女の声は至る所から聞こえ，ファーモイ

は受話器に向かって話すことはしない。）（湖底に埋没した教会の？）鐘楼に住みつき，舌にも歯が生えている巨大な川鮒（かわかます）(pike)[87]に追われていて怖い，と救助を求めるのだが，どの場所にいてどう行けばよいのか教えられずに，泣きじゃくるばかりだった。[90キロあっただろうこの巨大川鮒の骨は後日，湖底から引き上げられたことが，第3幕（66）でボニファスによって語られる。]

泣き声は徐々に薄れて聞こえなくなり，ファーモイはしばらく身じろぎもせずに立ち尽くす。フランシスが息を切らして駆けつけ，お互いに長い間，見つめあう。

フランシスはエアリアルの死に夫が関与しているのを直感的に見抜き，問いただす。ファーモイは，エアリアルは我々のものではなかったから，神に返したのだと答え，フランシスと出会う以前に見た奇妙な夢の話を物語る——神とともに黄色い中庭にいたとき，羽根を生やした娘が現れた。神のものであるにも関わらず，貸してほしいと頼み込み，やがて返さねばならない時がくるぞ，という神の言葉を了解のうえで，手に入れたのがエアリアルだった——。エアリアルは幼児期，肩の軟骨が丸く固まる良性の出来物があって，切除してもらったことがある。それが羽根の始まりだったと，ファーモイは主張する。

フランシスは娘が殺害されたことを認識して，嗚咽の声を挙げて詰め寄るが，ファーモイは，止むを得なかった，本来の居場所である神の元へ返したのであり，神の意志には逆らえないのだ，と繰り返すのみ。フランシスは再婚後，大事なものが次々と奪われた，自分の父親は蜘蛛や鼠にも慈悲をかけるような優しい人だった，と言って，ファーモイを4度ナイフで刺し，エアリアルの所在を聞き出そうとする。倒れたファーモイの上にのしかかり，なおも居場所を問うフランシスに，ファーモイは「コーラ湖」とひと言言い残して，絶命する。彼女はナイフを放り投げる。「死と生」の主題歌が流れ，暗転。

第3幕　第2幕から2ヶ月後。「死と生」の主題歌が引き続き流れる。舞台中央にエアリアルの遺体を収めた柩が安置されている。午前中に到着したものの夕方まで床で眠ってしまっている軽装のエレインを，スティーヴンが揺り起こす。コーラ湖は沼湖だったため，10年前の遺体でも保存状態が良かったが，法医学検査（司法解剖）によってエアリアルの亡骸はひどく損傷させられたという。父親による犯行だとスティーヴンは思ってもみなかったが，エレインは既にヴェニスの会議に同行した際に，エアリアルは「運命のなせる業」であり，時を超えて決定される「宿命」（Necessity［61］）であること，宿命の織り成す絨毯には予測不能なひとひねりが加えられている，といった暗示を父親から聞かされており，うすうす察知していた。

エアリアルをファーモイの傍に埋葬することをフランシスは望んでいるが，母親を嫌っているエレインは反対し，母親とは縁を切ってこの自宅でティンカーのように好き勝手に暮らすつもりだと言う。彼女は既にファーモイ殺害事件の裁判で，フランシスに不利な法廷証言を行っている。ファーモイの葬儀はフランシスの意向で近親者のみで営まれたが，低俗や感傷，暴利からの国家救済を志したファーモイの政治家としての名声は，このエアリアルの遺体捜索によって台無しになり，逆にフランシスが悲劇の殉教者のように扱われるのが彼女には耐えられないのである。

フランシスとボニファスが登場。フランシスはエアリアルの埋葬に立ち会うのを許可され，1泊2日の期限

付きで保釈になった。柩の遺体にキスし，じっと眺めるフランシスに，昨今では心神喪失を根拠になんでも保釈になるが，自分は決して許さない，フランシスの犯行は下劣な復讐だが，ファーモイの行為は，神の壮大さを秘めた純粋な犠牲行為である，とエレイン。フランシスは，もっと早く殺さなかったことを後悔こそすれ，自由を得るために心神喪失を主張するのも恥としない，エアリアルの遺体は夫の傍に埋葬するのが夫の意思に叶うはず，と答える。一方，エレインも，父親の葬儀では喪主として切り盛りし，墓所の選定や墓石の購入まで一手に引き受けたことを強調し，エアリアルとの合同埋葬に反対する。しかし，すでに新たな墓所と墓石を手配して，二人を一緒に埋葬する計画であり，どうしてエレインと仇敵のようにいがみ合わねばならないのか，とフランシスは嘆く。エレインは父親の墓参りに行く，と退場。

遺体を見ながら，ボニファスは，湖底から潜水夫によって発見された人骨は７体，うち１体の手首には丸石が縛りつけられていて，自分の母親に間違いないだろうが，正式な鑑定結果待ちだという。ファーモイが経営していたセメント会社は不慮の死以後，業績が悪化しており，経営を任されたスティーヴンは，会社の相続権を得たら売却するつもりだという。採石場を借り受け，密輸トラック１台と古小屋から始めたセメント事業のお陰で，家や車，学歴や海外旅行が享受できているのであり，スティーヴンを懐妊して産気づいたときもセメント輸送のトラックに家族で乗っていたくらいだ，とフランシスは事業相続の説得を試みる。しかし，スティーヴンは，結審までは力になるが，将来は自分の好きな道を歩む，と譲らない。

フランシスは不機嫌になり，蛇に乳（気づくと血）をふくませる悪夢を最近よく見るが，蛇の正体はエレインではなく，スティーヴンだったのか，と彼の忘恩をなじる。すると，今度はスティーヴンが，母親が心底愛していたのは死んだジェイムズやエアリアルであって，自分やエレインはその陰に隠れて惨めな思いをしてきた，他人から名前を訊かれたらジェイムズと答えていたほどだ，と訴えて，退場。

母さん梟が雛梟に餌を与えてきたが，挨拶もせずに飛び去ったという月刊誌『ナショナル・ジオグラフィック』の記事を引き合いに出して，鮭にしろ樹木にしろ，自然界にある素晴らしいものはみな，母親なしで自由に生きている，と慰めのつもりでボニファスは語りだす。しかし，フランシスは，彼がエアリアル失踪の真相を気づいていながら黙っていたことへの不信感から，出て行くように命令する。親族として保釈人監視責任のあるボニファスは，外の車内で待機する，と言って退出。

フランシスは柩の遺体に祈りを捧げる。エレインが戻り，ファーモイの遺体が墓から移送されたことを怒るが，口論する気分でないフランシスはすぐに退出。エレインは柩を見ながら，天国なんか空っぽになれ，と呟く。

セアラが登場。金魚鉢に収まるくらいに遺体が萎縮していると驚き，妻が夫の遺体を移すのは当然のこと，と諭す。エレインは，自分が母親を憎む理由は，母親には生まれつき魂が欠如しているように思えてぞっとするからで，この機会に彼女を最後の審判の日まで黙らせてやる，と殺意を仄めかす。さらに，セアラが自分の姉妹が殺されて湖に捨てられるのを黙認し，姉妹の夫と結婚したことを非難する。それに対してセアラは，姉妹の夫と早くから交際していたのは自分の方だったのに，詫びひとつなしに横取りされたから取り返したまでだ，なかば期待して見守ることと，実際に手を下すこととは雲泥の差がある，と言い残して立ち去る。

エレインは柩に近づき，毛髪が幾房か付着しているエアリアルの頭蓋骨を取り出して高く掲げながら，語りかける[88]。目覚めている時は普通の姉妹のように仲良しだったのに，夢の中では敵同士になること，幼い頃，土曜の朝に黒い人形をベッドに並べては二人で手足をもぎ取って遊んだことを思い出し，ファーモイとは死ぬ前に争ったのか，と問いかける。

玄関口にファーモイが登場。第2幕最後に殺害されたままの服装で，血だらけである。エレインは彼に気がつき，後ずさりして話しかける。ファーモイ（の亡霊）は，エレインが誰かも分からず，エアリアルの名前すら覚えがないと答える。彼は黄色い中庭にいる娘［＝エアリアル］に会わなければならないが，地名も場所も分からない，と言って退場する。

入れ違いにフランシスが戻り，頭蓋骨をエレインの手から取り上げ，柩に戻す。ファーモイの墓を移したことを責めるエレインに，フランシスは，死んだジェイムズの埋め合わせになるような男の子が欲しかったのにエレインが生まれた，シマウマの種馬が生ませた子だろう，と侮辱する。エレインは，自分はジェイムズの生まれ変わりであり，惨殺されたファーモイでもあり，エアリアルでもあり，掌中に死を持つエレインである，と言ってフランシスの喉首をナイフで刺す。

フランシスは倒れて，首を抑え，口からは鮮血がほとばしる。懸命に立ち上がって柩につかまり，中を覗きこんで，「逝かせないで」と血の凍るような悲鳴を上げて，エレインに倒れかかる。エレインはそのままフランシスを床に滑るように倒れさせ，ナイフを捨てて，佇む。「死と生」の主題歌が流れ，暗転。

この作品では発生順に挙げれば，妻殺し，娘殺し，夫殺し，母殺しという4種類ものパターンで殺し合う一族・一家が描かれる。さらには娘の遺体の頭蓋骨も舞台に上げられ，観客や読者に与える印象は陰惨さを極める。まるでマーティン・マクドナの『孤独な西部』や『イニシモアの中尉』を思わせる凄惨さである。マクドナの舞台には不思議なことに，凄惨さを突き抜けた破天荒な滑稽さがあるのに対し，マリーナ・カーの凄惨さは剝き出しの陰鬱さのままである。

遺体を別の墓に移動させられたためだろうか，居心地の悪くなったファーモイの亡霊が登場し，現世の娘のことも理解できずに彷徨する悲惨な様子が描かれている。姉に殺された『猫ヶ沼のほとりで』のジョウゼフ，心中を企てて双生児のポーシャに土壇場で見捨てられた『ポーシャ・コフラン』のゲイブリエル，そして妻に殺されたファーモイ。女に殺された男たちは，いずれも（日本風に言えば）成仏できないのか，この世に亡霊として立ち現れては去って行く。

また，幻覚なのか異界からの声なのか，エアリアルの声が電話口から聞こえるのは，まさしくマクファーソン（Conor McPherson, 1971-）が『堰（せき）』（*The Weir*, 1997）のなかでヴァレリーに語らせた，水死した愛娘からかかる電話の怪奇体験と同じ趣の設定であり，電話という近代的装置を介在させることでいっそう都市伝説めいた恐怖を

煽っている。

この作品はギリシア悲劇，エウリピデス（Euripides, c. 484-406 B.C.）作『アウリスのイーピゲネイア』(*Iphigenia at Aulis*, 408? B.C.)に基づくという指摘がある。[89] 悪天候によってアウリス港から出航できないギリシア軍のために，総大将アガメムノン(Agamemnon)から呼び寄せられた娘イーピゲネイアがみずからを犠牲に捧げる物語である。

だが，梗概からも明らかなように，エアリアルは決して，自らの意思と判断で自分の命を犠牲にして父親の政界進出を助けようとした訳ではない。犯行の模様は明瞭ではないが，意思に反して父親に殺害されたというのが事実であろう。溌剌たるエアリアルが登場するのは第1幕だけで，第2幕は電話の声を除けば不在，第3幕は柩の遺骨，という構成が示すように，この劇の標題が果たして『エアリアル』で妥当なのかについても，議論の余地が残るだろう。

'Ariel'は，「神のライオン」または「神の祭壇」を意味するヘブル語に由来し，聖書のイザヤ書29章では「エルサレムの都」を表わすこともある。しかし，一般的にはシェイクスピアの『テンペスト』(*The Tempest*, 1611)の精霊，ミルトン(John Milton, 1608-74）の『失楽園』(*Paradise Lost*, 1667）における反逆天使の一人，ポウプ（Alexander Pope, 1688-1744）の詩『髪の毛盗み』(*The Rape of the Lock*, 1712-14）でベリンダを守る精霊などの連想を伴うだろう。[90] あるいはシルヴィア・プラス（Sylvia Plath, 1932-63）の詩集『エアリアル』(*Ariel*, 1965）を思い浮べる向きもあるかもしれない。ファーモイにとってのエアリアルのイメージは，「黄色い中庭」にいる娘であったことから，彼が買い与えた新車も「紋黄蝶のような色」(a suurt of a buhherfly yella [22]）だった。ひらひらと軽やかに飛び回る黄色い蝶々のイメージは，まさしくこうした空気の精霊のイメージと結びつく。

その一方で，「エアリアル」号は，ロマン派詩人シェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)の愛用のボートの名前でもあり，シェリーが1822年イタリア北西部レリッチ（Lerici）沖で暴風に遭い，このボートから転落して水死したことを思い起こせば，コーラ湖に沈められた少女の命名として重層的な意味を帯びてくる。

『エアリアル』の問題点は，ファーモイの信じる神が一般の観客・読者にどれだけのリアリティや説得力を持ちうるか，である。長女を血の犠牲として捧げることで彼の政界進出の野望はきちんと叶えられるのだが，その契約・取引はもちろん彼の心の中でのみ行われる。彼の一連の信仰と行動が，たんなる精神異常者的な狂信・妄想にすぎないのか，ほんとうに神との霊的接触や交信に基づくものなのか，ことの性格上，確証は得られない。一定の期限付きで過酷な犠牲の報酬を要求する神との約束は，む

しろその性格から言って，ファウスト伝説に登場する悪魔メフィストフェレス（Mephistopheles）との約束に近いものであろう。ファーモイ自身にその認識はあったのか。彼は自分の神が悪魔と同等の存在であることを自覚していたのだろうか。

ファーモイが，その目の中に復讐の怒りを感じ取ったと表明するピエロ・デッラ・フランチェスカの絵画「キリストの復活」（1463～65年頃製作）について，美術評論家たちは次のように指摘している。

この絵に描かれたキリストの顔は，＜ほとんど愚鈍な＞＜森のキリスト＞，すなわち＜田舎の神＞であり，「ピエロは身近な人間と崇高なイメージを融合させるという，離れ業をやってのけた」[91]のであり，言い換えれば「描写の面では粗野な人間となっているが，しかしピエロが人間について抱いている具体的で均衡のとれたおごそかな理想像と完全に合致している」[92]のだという。より具体的に言えば，中世初期の彩色磔刑像に見られる「腫れぼったい目と人を引きつけるような視線によって帰依者たちを高みから見下ろしている」一方，「労働者の肉体的強靭さ」や「悪党を思わせる平たい鼻」「粗野な髭」がピエロによって付け加えられたことで，「苦悩に満ちて眠りを知らず，物事に集中して微動だにしない黒い目を描き，永遠なるもののあらゆる神秘をそなえ，催眠術のように人を魅了しながら近づきがたいイメージを生み出したのだった」[93]とされる。

すなわち，死から甦った直後であるから当然キリストには「近づきがたいイメージ」があるものの，いま引用した評論家３者は誰ひとり，裏切った人間たちに対しての復讐に燃える怒りなどを復活のキリストの表情に読み込んではいないことが分かるだろう。筆者もこのキリストの表情や目を繰り返し眺めてみたが，真正面から見据える視線の強さに不気味な威圧感は感じるものの，人間に復讐してやろうという激しい憤怒は伝わってこない。むしろ，平然とした表情の底に哀しさを湛えているような気さえした。この絵に対するファーモイ，あるいはマリーナ・カーの独特な受け止め方に筆者は共鳴できなかったことを記し，表情の部分だけの拡大図を参考までに末尾に掲げる。

首相就任寸前で挫折する政治家ファーモイ像は，初演が『エアリアル』より９ヶ月ほど先行したセバスティアン・バリー（Sebastian Barry, 1955-）の『後背地』（*Hinterland*, 2002）の主人公スィルヴェスター（Johnny Sylvester）を連想させるという指摘がある[94]。スィルヴェスターは，任期中汚職[95]の噂が絶えなかった故[96]ホーヒー首相（Charles Haughey, 1926-2006）をモデルとし，既に政界を引退した70歳の政治家が，前立腺検査結果の電話通知を待っている間に，長年にわたる女性新聞記者との不倫と結婚生活の破綻を嘆く妻デイジー（Daisy）や神経衰弱の息子ジャック（Jack），

元同僚で友人だったコーネリアス（Cornelius）の亡霊などの来訪を受け，悠悠自適の隠居生活を送るどころか，さまざまな譴責にあう物語である。政治家個人の内面分析，政治家の家族との不和などを主題とし，アイルランド現代史の文脈のなかに演劇を位置づけた点で，カーの『エアリアル』とバリーの『後背地』は共通の認識が感じられる。

⑩『お肉にお塩』（*Meat and Salt*）1幕劇

ネットから得られる情報[97]によれば，8歳から12歳の児童向けの芝居で，『リア王』に類似した伝統的なお伽話に基づくという説明[98]と，マリーナ・カー自作の短篇小説を劇化したものという説明[99]もある。ジム・ノーラン（Jim Nolan, 1958-）の『カーンへの道』（*The Road to Cairn*）と二本立てで上演され，『息子たちと娘たち』（*Sons and Daughters*）の統一タイトルが付けられた。

愚直なまでに正直者の末っ子の「小さな娘」（Little Daughter）が，黄金の足を持ち，絶えず冷笑する暴虐的な「大きな父さん」（Big Daddy）に向かって，「お肉がお塩を」愛するように愛しています，と言ってしまったがために，王国から追放される。ムーン・ハウンズ山脈（Mountains of the Moon Hounds）を彷徨い，猛り狂う狼の群れに追われ，同じように追放の身の母親（馬の足を持ち，自分が誰だか分からなくなっている）に出会うなどの数々の冒険を経て，彼女はその正直さに惹かれる「若き王」（The Young King）と巡り合い，婚約する。宴に招かれた彼女の父親はそこで思いがけないことが待っていた，というひねりの筋らしい。一方，ノーランの劇の方は，妖精の呪いを受けて倒れた職人の父親に代わって，農民の男の子が魔法のフルートのお陰で活躍するもので，少年の通過儀礼を描いた正統派の児童演劇。このカーの芝居は観客対象を女の子に想定し，父親の強大な権力に無心に挑戦する娘，というアンジェラ・カーターばりのフェミニスト演劇の設定を構築し，少女たちが切り開くべき未来へ寄せる，カーの強いメッセージが読みとれる。主人公の「小さな娘」役にルース・ネッガ（Ruth Negga）という黒人の女の子が選ばれたのも示唆に富むキャスティングであろう。

⑪『女と案山子（かかし）』（*Woman and Scarecrow*）2幕

本年6月15日にテキスト発売との予告があり，予約注文を入れておいたものの，投稿締切日までに到着しなかったため，残念ながら梗概を紹介できない。アイルランドではなく英国ロンドン初演が意味するものは，マリーナ・カーの国際的評価の高まりと観客市場規模の格差であろうか。

簡単な紹介文によれば，８度の出産でげっそりとやつれた女が死に直面し，過ぎ越し人生や愛について考え，案山子に向かって話しかける挽歌（threnody）であるという。

(II) まとめに代えて

＜マリーナ・カーの劇作の推移＞

本格的な舞台上演としての処女作『暗闇に低く』は，劇作術，構成，技法の点でマリーナ・カーの一連の作品において異質である。全16場という頻繁な場面転換，男性の妊娠，カーテンに姿を覆われた登場人物，平仄の合わない台詞。カー自身，「初期の３，４作品はベケットに大きな影響を受けた[100]」ことを認めている。テキストは未見だが，『ザ・マイ』に先立つ『鹿の降伏』『この愛という代物』『ウラルー（哀歌）』は，いずれもベケット色の濃い内容の作品であることが窺える。こうした傾向が『ザ・マイ』以降に引き継がれなかったのは，カー自身がこれらを失敗と見なしたからなのか，実験的手法はもう十分と考えたからなのかは分からない。

『ザ・マイ』の成功はマリーナ・カーの劇作の転換点である。女性たちが苦しみながらも毅然と耐え忍ぶ姿を数世代にわたって写実的に描写する一方で，作品全体を神話世界や追憶のなかに再現した技法は際立っている。この路線は『ポーシャ・コフラン』，『猫ヶ沼のほとりで』に引き継がれ，死に責任のある双生児の幻聴に悩まされるポーシャ，生き別れした母親を待ち続けるヘスターは，ともに異界との境界を彷徨う存在であり，最後には自分の命を絶つことでしか出口を見出せない。この両作品でも背景的に言及されてきた近親相姦の遺伝の主題は，『ラフタリーの丘で』において，壮絶な展開を見せる。動物の死臭や汚物の異臭が立ち込めるこの丘で，想像を超えた，慄然とする禁断の人間関係のドラマが暴露される。『エアリアル』は，邪教とも思える異神を崇拝する政治家によって引き起こされる家庭崩壊の惨劇である。人身御供として愛娘を捧げる父親の狂気や，その報復を果たす妻，愛情の飢餓から母親を殺害する娘など，凄惨さが極まった感がある。

＜誕生日へのこだわり＞

アイルランドの小説家トレヴァー（William Trevor, 1928-）の「ティモシーの誕生日」という佳作短篇に触発され，誕生日を題材とする短編小説のアンソロジー編纂を思い立った村上春樹が，予想外に該当作品をなかなか見つけられず，「誕生日というのはそもそも文学のテーマになりにくいものなのだろうか？」[101]とまで悩んだというのが信じられないくらい，マリーナ・カー作品は，登場人物が誕生日を迎える設定にあふれている。『ザ・マイ』のマイは40歳の誕生日に，心のこもった贈り物ではなく10ポ

ンド紙幣１枚（５千円札程度の感覚）を渡されて憤慨し，浮気な夫との破局を迎えていく。『ポーシャ・コフラン』のポーシャは30歳の誕生日に高価なブレスレットを夫から贈られるが，その翌日には死を選ぶ。『エアリアル』の少女エアリアルは16歳の誕生日に父親から新車をプレゼントされるが，その車に一緒に乗って外出して父親から殺害されてしまう。祝うべき記念日が呪うべき記念日にすりかわってしまう皮肉をマリーナ・カーは３作品で描いて見せている。同じ趣旨になるが，このことが示すように，カーは登場人物の年齢を比較的明確に設定している。構想段階で綿密な時間進行表を準備し，それに忠実に依拠しつつ執筆を進めたことが推察される。

＜脱・少子化の流れ＞

興味深いのは，マリーナ・カー自身の３度の出産体験に呼応するかのように，戯曲にきちんと登場する（未成年の）子どもたちの数が徐々に増える傾向が読み取れることである。

『暗闇に低く』のビンダーは（20代で成人ではあるが），ベンダーの一人娘であり，現実とも虚構ともつかない妊娠状態にはあるものの，まだ彼女に子どもはいない。『この愛という代物』や『ウラルー（哀歌）』には，登場人物リストから判断する限りでは，子どもはいない。つまり，この３作はいずれも子ども０人。

『マイ』は中年にさしかかった３姉妹が中心人物で，主人公マイには４人の子どもがいる設定であるけれども，実際に血肉を与えられて舞台に立つのは，概ね16歳の時期のミリーひとりであり，その後長じたこのミリーにも一人息子しかいない。『ポーシャ・コフラン』のポーシャは３人の子どもの母親であるが，＜片付けられない女＞で子育ての意欲に欠ける彼女の脆弱な精神状態のせいもあってスティーヴン以外の言及は乏しく，子どもたちの存在感は総じて希薄で，舞台上の登場人物数としてはまた０人に戻る。しかしながら，『猫ヶ沼のほとりで』のヘスターには，一人娘ジョウジーへの母親の情愛が感じられる。この３作品は子ども０ないし１人と見てよいだろう。

『ラフタリーの丘で』は，一見３人きょうだいの外見をとりながら，真相から言えばダイナとデッドという２人の子どもと，ダイナの一人娘ソレルということになる。そして『エアリアル』でようやく，16歳のエアリアルを筆頭に10代の子どもたち３人が登場している。この２作品は，２ないし３人の子どもが活躍すると言える。最新作『女と案山子』では，８度の出産を経験した女性が主人公で，子どもの数は一挙に８人にまで飛躍するが，おそらく舞台に登場する子どもは一部に限られるであろう。とはいえ，マリーナ・カーの現実の子育ての経験が，作品に描きこむことのできる子どもの数を徐々に増やしていることが分かる。

テキスト

Marina Carr, *Plays One* (London: Faber and Faber, 1999)
——, *On Raftery's Hill* (Oldcastle, Co.Meath: The Gallery Press, 2000)
——, *Ariel (*Oldcastle, Co.Meath: The Gallery Press, 2002)
——, *Woman and Scarecrow (*London: Faber and Faber, 2006) [投稿後に入手]

翻訳

マリーナ・カー（舟橋美香　訳）『ザ・マイ』（東京演劇アンサンブル上演台本）

参考文献

前田真利子・醍醐文子（編著）『アイルランド・ゲール語辞典』（大学書林，2003年）
Malcolm Maclennan, *A Pronouncing and Etymological Dictionary of the Gaelic Language* (Edinburgh: Acair and Mercat Press, 1979)
『ギリシア悲劇全集　第四巻』（京都：人文書院，1960・74年）[エウリピデス『アウリスのイーピゲネイア』（呉　茂一　訳）を所収]
Margaret Llewellyn-Jones, *Contemporary Irish Drama and Cultural Identity* (Bristle: Intellect Books, 2002).
Sebastian Barry, *Hinterland* (London: Faber and Faber, 2002).
Alexander G. Gonzalez (ed.), *Irish Women Writers: An A-to-Z Guide* (Westport, CT: Greenwood Press, 2006).

註

1）もう執筆なんかできない，と育児ノイローゼに悩まないことが，「赤ちゃんが生まれたときに必要とされる降参の要素で，今回はもう私は戦わないことに決めました」とカーは述べつつも，「エリオット（George Eliot, 1819-80）は晩婚で子どもはなし。ブロンテは子どもなし。オースティン（Jane Austen, 1775-1817）は子どもなし。プラス（Sylvia Plath, 1932-63）は子どもたちと折り合いが悪く，セクストン（Anne Sexton, 1928-74）もそうでした。ここで起きている方程式は何でしょう？　ときおり思うのですが，私たち女性作家は，執筆と家庭生活の両立に苦労したエリザベス・ギャスケル（Elizabeth Gaskell, 1810-65）や例の自分だけの部屋について語ったヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf, 1882-1941）から少しも先に進んではいないのです。実際，子どもたちとの家庭生活は大混乱です。自分だけの創造的な空間を作り出すのは困難です」と，作家と母親の両立の困難を語っている。(Carolyn Clay, 'Family affair: Marina Carr's incestuous Ireland', April 3-10, 2003, http://www.bostonphoenix.com/boston/arts/theater/documents/02794647htm 2006/ 3 /11取得)

2）'A Playwright's Post-Beckett Period', interview with Marina Carr by James F. Clarity, *The New York Times*, November 3, 1994, Section C, p.23.
　このときの体験が，『ザ・マイ』のミリーが恋に落ちる男性との出会いの場所が，ブルックリン（の安アパートの屋上）という設定（165）や，アラブのお姫様にマザー・グースのリング・ダンス「バラの輪」をマイが上手に指導する設定（153）に生かされたのでは，と筆者は推測する。

3）1981年に当時のホーヒー首相（Charles James Haughey, 1926-2006）の肝いりで，ブレインの詩人・小

説家クロウニン（Anthony Cronin, 1928-）の提言を受けて設立された政府機関。アイルランド生まれもしくは居住が資格要件で，文学・視覚芸術・音楽の３領域から200名以内（発足時は150名以内）の会員で構成され，新規加入は現会員の選挙による。首鎖状の黄金の襟をまとう会長（賢者を意味する「スィー」[Saoi]と呼ばれ，歴代会長にはベケット，メアリー・ラヴィン，ヒーニーらがいる）をトップに10名の運営委員がいるが，この肝心の要職に卓越した人材が薄いという批判がある。会員は年金が支給され，芸術活動に専念できるメリットがある。Brian Lalor (ed.), *The Encyclopaedia of Ireland* (Dublin: Gill & Macmillan, 2003), p.36.

4）普通名詞ならbinderは「バインダー」と発音すべきと思われるが，母親の名前ベンダーと音韻を揃えるには，「ビンダー」の方が好ましいと判断した。

5）スコットランドではbaxterは「パン屋」（baker）の意味で用いられる。第１幕第４場や第２幕第１場のビンダーやボウンもそうなのだが，第２幕第３場ではバクスターも手作りロール・パンを持参している。

6）アイルランド伝説のフィアナ騎士団の団長で，オシアンの父親。

7）オファリー州に実在する湖。マリーナ・カーの住居にある地名でもある。

8）benderには，「曲げる物・人，曲げ機械」の他，俗語では「大酒のみ」「受け身役のホモ」「脚」「腕・肱」などの意味もある。

9）Maria Kurdi, 'Alternative Articulations of Female Subjectivity and Gender Relations in Contemporary Irish Women's Plays: The Example of Marina Carr', in *Codes and Masks: Aspects of Identity in Contemporary Irish Plays in an Intercultural Context* (Frankhurt: Peter Lang, 2000), p.60.

10） Melissa Sihra, 'Playing the Body: Marina Carr's Comedy of (Bad) Manners', in Eric Weitz (ed.), *The Power of Laughter: Comedy and Contemporary Irish Theatre* (Dublin: Carysfort Press, 2004), p.161, 165.

11）http://www.irishplayography.com/search/play.asp?play_ID＝29　2006/５/19取得

12）マライア・エッジワース（大嶋磨起，大嶋浩　訳）『ラックレント城』（開文社，2001年），p.25，pp.165-166.

13）写真掲載の許諾をいただいた東京演劇アンサンブル・小森明子さんに感謝いたします。

14）Constanceの愛称。３姉妹のなかではもっとも堅実な家庭生活を営んでいる彼女は，たしかに'constancy'「志操堅固」の名に値する。

15）百歳の登場人物はあまり例がないと思われるが，本年来日講演を行う上海京劇院の人気京劇『楊門女将』では，楊家の当主・楊宗保の死後，その祖母の佘太君が元帥に任命されるが，彼女も百歳という設定になっている。（『日本経済新聞』，2006年５月13日，p.33.）

16）地図上でコネマラ沖に見出せるのは，ボフィン島を意味する「イニシボフィン」（Inishbofin）のみ。アイルランド語で fraoch [fri:x] は「ヒース（の茂った地）」あるいは「獰猛，凶暴」を意味し，lan [la:n] は「いっぱいの，充分な」を意味する。発音記号に従えば，＜フリークラーン＞＜フリーフラーン＞が近いように思うが，ここでは舟橋美香訳に倣う。

ヒースのラテン語名「エリカ」は，西洋人女性にも日本人女性にもよく命名されるから，思い切って「エリカお婆ちゃん」と平易な発音に直して訳す手もある。

17）Helen，ときにEleanorの愛称。前者であれば，カーの好きなギリシャ神話のなかで，ゼウスとレダの間に生まれた絶世の美女ヘレネーの連想を伴う。

18）デ・ヴァレラ大統領は1937年５月11日下院で憲法草稿法案の趣旨説明に２時間半もかけて熱弁を振るった。しかし法案は６月14日の下院議決では賛成62，反対48と圧倒的な支持は取りつけられず，７月１日に総選挙と国民投票が同時に実施された。その結果，投票率75.8%，憲法草稿への賛成票は（下院議決とほぼ同

じ割合ながら）56.52%と過半数には達した。こうして憲法が発効したのが1937年も押し迫った12月29日のこと。したがって1938年が実質的にこの憲法がアイルランド社会で機能し始める年に当たる。[J. Anthony Foley and Stephen Lalor (eds.), *Gill & Macmillan Annotated Constitution of Ireland 1937-1994* (Dublin : Gill & Macmillan, 1995), p.11,19.]

19）元来の意味が「光・炎の運び手」「暁の子・星」を表わすように，12枚の翼を持つ高位の天使であったが，教父の聖ヒエロニムス(ca.347-420)がイザヤ書14章12-15節のルーシファーの箇所を読んで，堕天使たちのリーダーのサタンと同一視し，ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)の『失楽園』(*Paradise Lost*, 1667）でも主役に据えられたことで「サタンと同等と考えられている天使」という解釈が定着したという。［ローズマリ・エレン・グィリー（大出健　訳）『図説　天使百科事典』(原書房，2006年)，p.479.　原著はRosemary Ellen Guiley, *The Encyclopedia of Angels* (Visionary Living, 2004).]

20）イニシュボフィン島から本土をめざすとき，最短距離にある漁港。

21）レベッカ（Rebecca）の愛称で，ユダヤ人の女性に多いとされる。聖書ではイサク（Isaac）の妻で，エサウ（Esau）とヤコブ（Jacob）の母親リベカ（Rebekah)。

22）口論は高尚な言葉遣いで始まるとして，ミリーはロバートが「第4の戒律，つまり＜汝の父を敬え！＞を投げてくる」(128）と述懐している。しかし，十戒の第4は＜安息日を守れ＞という掟であり，＜父母を敬え＞は第5の掟のはずである。マリーナ・カーがこのことに無知であるとか記憶違いをしたとは到底考えにくい。ここでは意図的に誤りをまじえ，ミリーの宗教教育や聖書理解が完璧なものではなかったこと，そういう不十分な教育環境で育ったことを示唆しているのかも知れない。

なお，下記の聖書の解説書によれば，十戒の前半の5戒律は人間と神との間の掟，後半の5戒律は人間相互の掟とされ，従って，前半部に属する第5戒律＜父母を敬え＞は倫理規定ではなく，宗教的規定と解すべきであり，子どもの誕生には父母と神の三者が関与しており，生んでくれた父母を敬うことは，創造主である神を敬うことである，という。また，十戒が総体として成人男性を聞き手として想定した掟であることから，この＜父母を敬え＞は，ミリーのような少女が父親ロバートを敬うというよりも，ロバートのような大人が年老いた両親を敬うことを本来は意図していたとされる。John Bowker, *The Complete Bible Handbook: An Illustrated Companion* (New York: DK Publishing, 1998), p.57.

23）テキストではフレクローンが45歳，ジュリーが43歳で出産したという（129)。最近の新聞報道によれば，世界一の最高齢出産は2005年にルーマニア人女性Adriana Iliescuの体外受精（IVF）による66歳出産。イングランドの児童心理学者Patricia　Rashbrookも63歳で体外受精による妊娠に成功し（'British　woman expecting at 63', *The Japan Times*, May 7, 2006, p.6.)，帝王切開で男児を出産した（'British woman, 63, gives birth, *Ibid*., July 9, 2006, p.6.)。ちなみに，英国での最少年齢出産は1997年に12歳9ヶ月の例があったが，まもなくこの記録をエジンバラの12歳の少女が更新する見込みだという。('Girl, 12, to be U.K.'s youngest mum', *The Japan Times*, May 13, 2006, p.5.)

24）中世において修道士たちが法衣(tunic)とともに身につけていた幅狭のポンチョのようなもので，永遠の誓いを立てて修道生活に入ることは叶わないが，キリスト者としての完成を目指す人々が着用していた。時代と共に徐々に簡略化されていき，現在では切手大の2枚の荒い布切れとそれらを結ぶ2本の紐だけになってしまっている。[Kevin Orlin Johnson, *Why Do Catholics Do That ?: A Guide to the Teachings and Practices of the Catholic Church* (New York: Ballantine Books, 1994), p.216.

25）この部分が作品のなかでは，俄かに信じがたい告白に筆者には思える。「セックス目的のセックスはただそれだけのもの」と語るベックに，マイが「本当にそうなの？」と訊き返す台詞に*innocently*とト書きが添えられている（160）のを信じれば，マイのこの行きずりの体験はこの年の夏以後，半年のうちに行われたことを示唆する。筆者は最初に読んだ時に，マイはサム・ブレイディと寝て屋敷の土地購入代に当てたので

はないか，「最高入札価格」(111) とはマイの肉体なのではないか，だからロバート帰還後，ブレイディが嫉妬に狂って狼藉をふるった (157) のではないか，と想像していた。服装倒錯者にして露出狂のこの男は，同性愛者の雰囲気もあるので，マイの不倫相手として考えにくいのではあるが。牝牛を「ビリー」と雄牛のように呼び，赤いブルーマー姿の「ロデオの女王」ブレイディに体現されたcross-dressingは，処女作『暗闇に低く』でカーが追及した主題のひとつであった。

26) 舟橋美香「『マイ』翻訳を通して」，『日本アイルランド協会会報』第61号，2006年4月，p.4.

27) Mika Funahashi, 'Theatre of Possession: A Discussion of Marina Carr's *The Mai* and the Theatre of Legend Making', 『演劇研究センター紀要』第Ⅰ号 (2002年度)，(早稲田大学演劇博物館演劇研究センター，2003年)，pp.344-345.

28) 'Interview with Marina Carr', in eds Heidi Stephenson and Natasha Langridge, *Rage and Reason: Women Playwrights on Playwriting* (London: Methuen, 1977), p.150.

29) 小嶋千明「運命の女たち—マイの語るもの」，ブレヒトの芝居小屋・ワークショップ (編)『マイという女』(東京演劇アンサンブル，2005年)，p.18.(公演プログラム)

30) 定冠詞の有無で関連するのは，フレクローンの母親が自分のことを (定冠詞付きの)「かの公爵夫人」もしくは (冠詞を) 略して「公爵夫人」と呼ばせていたことである。(The Duchess, that's what I had to call her, or Duchess for short. [169]) この場合は定冠詞による特化・限定化として理解できるのだが，ファースト・ネームに定冠詞をつける用例ではない。

31) 'An early work, The Mai, took its title from a figure in Irish mythology who destroys her young.' Lyn Gardner, 'Death becomes her', *The Guardian*, November 29, 2004 http://arts.guardian.co.uk/features/story/0,,1361764,00.html 2006/3/11取得

32) Peter O'Dwyer, *Mary: A History of Devotion in Ireland* (Dublin: Four Courts Press, 1988), p.30, 258, 260.

33) 古村(こむら)龍也『図解　深層心理分析マニュアル』(同文書院，2000年)，p.233.

34) フロイド (高橋義孝・菊盛英夫　訳)『改訂版　フロイド選集・11　夢判断<上>』(日本教文社，1969/71年)，pp.295-296.

35) 'Interview with Marina Carr', p.148.

36) 衆議院法制局・参議院法制局・国立国会図書館調査立法考査局・内閣法制局『アイルランド憲法　和訳各国憲法集 (続) (一)』，1957年，p.54.

37) 大野光子『女性たちのアイルランド—カトリックの<母>からケルトの<娘>へ』(平凡社，1998年)，p.208.

38) 上掲書，p.212.

39)『アイルランド憲法　和訳各国憲法集 (続) (一)』，p.54.

40) 'Interview with Marina Carr', p.147.

41) Ibid., p.153.

42) Ibid., p.154.

43) オットー・ランク (前野光弘　訳)『文学作品と伝説における近親相姦モチーフ——文学的創作活動の心理学の基本的特徴』(中央大学出版部，2006年)，p.807.[原著はOtto Rank, *Das Inzest-Motiv in Dichtung und Sage: Gerundzuge einer Psychologie des dichterischen Schaffens*, 1912]

44)『トーマス・マン全集Ⅶ』(新潮社，1972年) 所収の『選ばれし人』(佐藤晃一　訳) を使用した。引用箇所はともにp.20.

45) Robert Hogan (ed.), *The Macmillan Dictionary of Irish Literature* (London: The Macmillan Press

Ltd., 1979), p.231.

46) 'Introduction' by William Myers to George Farquhar, *The Recruiting Officer and Other Plays* (New York: Oxford University Press, 1995), p.xiii.

47) Ibid.,p.x. ディケンズの小説『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843-44) の登場人物ギャンプ夫人 (Mrs Gamp) 同様に，酒好きな助産婦である登場人物マンドレイク夫人 (Mrs Mandrake) の役を男性俳優が演じるという奇妙な伝統があったこと，乱交よりも出産に関するタブーの方が厳しく，「気の毒なご婦人が陣痛中なだけ」(第5幕第2場) という夫人の台詞が観客のヒッシングを呼び，上演が停止したことなどを挙げている。

48) The Korean Times: Irish Play on Betrayal Comes Here, http://times.hankooki.com/lpage/culture/200511/kt2005110220201811700.htm 2006/5/19 取得。

49) 普通名詞の意味は「淡赤茶色」「栗色」「栗毛の馬」(a light brown or reddish-brown horse)「酸味のある植物（スイバ，カタバミなど)」(a plant with sour-tasting leaves that are used in cooking) がある。彼女の髪の色が明るい栗色だったのかも知れないし，付近に自生する野草にちなむのか知れない。

マリーナ・カーがジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) の小説『アダム・ビード』(*Adam Bede*, 1859) を読んでいれば，働き者の大工ビードや地主の孫息子ドニソーン (Arthur Donnithorne) を誘惑する，乳搾り娘ヘティ・ソレル (Hetty Sorrel) の連想が働いた可能性がある。ヘティ・ソレルはこのドニソーンに貞操を奪われ，妊娠する。後述の「ダイナ」の注記52)を合わせて参照。

50) Raftery は，「命令」「判決」「神意」などの意味のdecree にあたるアイルランド語reachtに由来し，メイヨー州に多い名前。http://www.hoganstand.com/general/identity/lists/r.htm 2006/5/1取得。

51) もちろん「死んだ」(dead) と発音が同じで，通常なら考えにくい命名。Dedalusの略称かなとも考えたが，テキストに言及はない。

52) 聖書の創世記30章21節に登場する娘デナ（ヤコブ [Jacob] と最初の妻リーア [Leah] の子）の連想を伴う。ヘブライ語で「裁かれた」(judged)「捧げられた」(dedicated) を意味する。人生の春夏を丘での生活に「捧げ尽くす」ダイナの生き方を暗示するものだろう。

先述のジョージ・エリオットの『アダム・ビード』には，メソディストの牧師を自称し，弱者への思いやりにあふれた女性ダイナ・モリス (Dinah Morris) が登場し，ダイナにとって，強姦された（ヘティ・）ソレルは救済すべき＜哀れな迷える子羊＞である。このあたりの二人の境遇や人間関係は，カーの戯曲の二人に通じるものがある。

なお，「ダイナ」はルイス・キャロルの物語の主人公アリスの仲良しの黒猫の名前でもあり，『不思議の国のアリス』の連想は，戯曲のダイナがたえず世話を焼かねばならない認知症の徘徊老人シャロウムが，「3月ウサギのように (like a march hare) 寝間着姿で駆け回っている」(18) 姿とつながっていく。

53) このときに出された料理は「仔牛の睾丸」(calf nuh [=nut] [15]) で，デッドが食べ残したこの料理をソレルが2，3個貰って平然と食べる (*Takes a few* [15]) ト書き指示がある。アメリカでは「山の牡蠣」「大草原の牡蠣」(Rocky mountain oyster; prairie oyster) と呼ばれるこの料理は珍味なのかもしれないが，わが国の「モツ」料理のように，ぎとつくような肉感的・動物的な雰囲気を冒頭から舞台に醸し出すのに役立っている。

54) 紙巻煙草Woodbineは1888年，William Henry WillsとGeorge Alfred Willsによって発明され，第1次大戦時の兵士の人気銘柄 (http://www.oxforddnb.com/public/themes/92/92738-content.html?articleid=9273 2006/4/17取得) で，1950s-60sに英国で人気を博した。筆者の手持ちのWills's "Wild Woodbine"は10本入りで，ちょうどわが国のマッチ箱サイズの大きさの箱に，woodbine（スイカズラ・忍冬）と思われる葉が描かれている。箱の下面にAntwerp International Exhibition, 1885においてGrand

Diploma of Honour (highest award) 受賞という記載は，上記の1888年発明と矛盾するのではあるが。なお，英米の煙草の価格は日本の数倍であるから，「ウッドバイン10本とマッチ」(15)のお土産は，決して安価ではないだろう。

55) 'shalom'の綴りであれば，ヘブライ語で「平和」を意味し，ユダヤ人が別れの挨拶として用いる言葉である。幾たびもこの丘や屋敷に「別れ」を告げながら，ついぞ離れることの出来ないシャロウムの姿が皮肉に反映された命名か。

56) Slieve Blooms, Mohia Lane, Black Lion, Ruedeskank, Croggan, Mucklaghの6地名。Slieve Bloom Mountainはオファリー州と南のリーシュ州 (Co. Laois) の州境に実在し，「花咲山」の語感かと思われるが，あるいは『ザ・マイ』でミリーの独白［7］にあるように，山の神の名ブルームにちなむのかもしれない。Mucklaghは，アイルランド語のmuchlach [mukləx] に由来するとすればpiggery (*Gaelic Dictionary*)，すなわち「養豚所，豚小屋；豚の群れ；下劣な男」(『アイルランド・ゲール語辞典』) を意味し，「豚飼町」の語感か。前半部のmuckには英語では「牛馬糞」「黒泥」「がらくた」の意味がある。いずれにせよ，音の連想はたしかに芳しくなく，シャロウムが「マクラーなんて名前の土地で，どうして幸せになれるかしら？」(16) と嘆くのも頷ける。

57) ダブリンの目抜き通りオコンネル通りにあり，1817年創業の屈指の格式をもつホテル。現在219室を擁し，シングル285ユーロ，ダブル325ユーロ，すなわち一泊4万円台の超豪華ホテルである。[『地球の歩き方 アイルランド　2006－2007年版』(ダイヤモンド社，2005年)，p.81.]

58) 'Dunn'はイングランド人風の姓で，アイルランド人には'Dunne'の綴りの方が多いとされ，中部地方のリーシュ州やオファリー州に集中している姓。(http://www.hoganstand.com/general/identity/lists/d.htm 2006/5/1取得)

59)「野ウサギ」にあたるアイルランド語'giorria'は，「小さい鹿」を意味し，人間に馴れない鹿と同様に，野ウサギにも野性や異界性が付与された。そこで，野ウサギ（特に白色）は妖精が化身したものであるとされ，<早朝に野ウサギを見るのは不吉だ>とか，<家の近くで野ウサギを見かけると家族の誰かが死ぬ>といった俗信が中世のアイルランドに普及した。また，魔女とおぼしき老婆が野ウサギに化けて乳牛の乳を吸う，という話も有名である。妊婦が野ウサギを見ると「兎唇（としん）」(上唇が縦に裂ける症例。「みつくち」) の赤ん坊が産まれるが，目撃直後にスカートの裾を引き裂いてその病気を衣服に転嫁してしまえば災いを防げるという言い伝えもある。収穫の最後の一束には野ウサギ (＝魔女) が隠れているので用心せねばならないという迷信もある。[Dáithí Ō Hógáin, *Irish Superstitions* (Dublin: Gill & Macmillan, 1995), pp.57-58, 72, 80.]　なお，聖書においては，野ウサギは穢れた生き物ゆえに「モーセの律法で食べてはいけない動物の1つ」とされ，レビ記11章6節と申命記14章7節にだけ登場する。[ウィリアム・スミス編（小森厚・藤本時男　訳）『聖書動物大事典』(国書刊行会，2002年)，p.196.]

ただし，現代のアイルランドで野ウサギを絶対に食べない，ということはなさそうである。アイルランドの料理本には「アヤッド（ニンニク風味）・ソース付きの野ウサギのシヴェ（赤ワイン煮込み）」(Civet of Hare with an Aillade) が紹介されている。野ウサギの骨付き肉 (joints) を小麦粉のなかで軽く転がし，一面にキツネ色になるまで焼く，といった手順で，1羽なら鞍下肉 (saddle) 2分割と後ろ足2本で4人前の料理が出来上がるという。もっとも名称からしてフランス料理風ではある。[Tamasin Day-Lewis, *West of Ireland Summers: A Cookbook : Recipes & Memories from an Irish Childhood* (London: Phoenix Illustrated, 1999), p.136.]

多産であることから「好色さ」，臆病であることから「恐怖」「小心」の両方の象徴である野ウサギに第1幕最後の強姦場面でソレルがなぞらえられているのは，彼女の立場や性格を的確にとらえた卓抜な比喩である。[Udo Becker (tr. Lance W. Garmer), *The Continuum Encyclopedia of Symbols* (New York/

London: Continuum, 2005), p.138.]

60)「大麦」と訳語を当てた原文はここでは'corn',「揺れる」は'swaying'。『大麦を揺らす風』(*The Wind That Shakes the Barley*, 2006) は，今年度のカンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドールに輝いたケン・ロウチ監督の映画の標題で，同名の革命歌のタイトルでもある。凶暴な軍隊「ブラック・アンド・タンズ」を送り込まれた1920年代のアイルランドを舞台に，独立のために闘う医学生を描くこの作品は，英国人を過去の帝国の歴史に向き合わせ，過去について真実を語ることは現在について真実を語ることになる，と監督は述べている。(*The Daily Yomiuri*, 30 May, 2006, p.6.;『朝日新聞』2006年5月30日，p.19.)

61) 名前から連想されるのはオケイシー(Sean O'Casey, 1880-1964)の『鋤と星』(*The Plough and the Stars*, 1926) の娼婦Rosie Redmond，デイヴィッド・リーン監督 (Sir David Lean, 1908-91) 作品映画『ライアンの娘』(*Ryan's Daughter*, 1970)の主人公Rosy Ryanくらいか。マクドナの『イニシュモアの中尉』(*The Lieutenant of Inishmore*, 2001) ではパドリックの飼猫が15歳の「トーマス」，マイレードの飼猫が「ロジャー卿」という名前だった。

62) 兼島孝『はじめてのネコ　飼い方・しつけ方』(日本文芸社，2005年) によれば，飼い猫の平均寿命は現在では13歳前後 (p.136) であり，猫の16歳はヒトの80歳，20歳は96歳にあたる (p.106) というから，ロウズィの16歳半はヒトの82歳と推定される。「子猫から十八年を悼みけり」(森川忠信) [『朝日新聞』「岡山歌壇」，2006年6月6日，p.29.] という句もあるから，もっと長寿の猫もいるようだ。

63) 英国に実在した人物で，神経繊維腫症 (neurofibromatosis) に罹患したメリック (John Merrick, 1862?-90) に対する呼び名に由来し，David Lynch監督によって同名タイトルで1980年に映画化された。

64) 不詳。背が屈み表情が仮面状を呈する「パーキンソン病」(Parkinson's disease) と，悪性リンパ腫の「ホジキン病」(Hodgkin's disease) を混同して，アイザックがでたらめに合成して出来た造語ではないかと筆者は推測する。

65) 中部地方のリーシュ州近郊に集中して多いとされる姓。(http://www.hoganstand.com/general/identity/lists/b.htm　2006/5/1取得)

66) 前半の'clon-'は「乾いた土地」(dry place) を意味するアイルランド語。水分に乏しい丘陵地帯を象徴する地名である。

67) 'Come Down the Mountain, Katie Daly'. *Favourite Irish Drinking Songs*というCD (EMPORIO, 1994) に収録されている。二階に引っ込んでいる長女に，「山を降りて来い」と歌うレッドの親父ギャグはユーモラスであるが，一方，ラフタリーの「丘を降りて」谷へ行く自由など持たない，奴隷のような拘束状態を宿命づけられたダイナには皮肉に響くかもしれない。

68) ゴリラに対する価値観がダイナとシャロウムとでは異なっていることに留意したい。「わたしたちは服を着て人間のふりをしているゴリラだわ」(30) とダイナが自嘲するとき，そこにはゴリラに対する一般的な偏見—『ココ，お話　しよう』によれば，「狂暴で扱いにくく，そのうえ頭がにぶいという評判の悪さ」を持ち，世論調査が示すように英国の子どもたちにとって「ネズミやクモとならんで，地球上でもっとも嫌われ怖がられている生き物」という認識—があらわであり，おそらくは<近親相姦を犯す，けだもの>という自虐的な想いが内奥にこめられている。一方，シャロウムが幼時にインドで体験したエピソードや，ゴリラ使いの男が語った「ゴリラの言語の話や，いかにゴリラたちが海の詩歌を成し遂げているか [あるいは，いかにその言語が海の詩情を含んでいるか]」(17) についての説明を，(真意はよく分からないなりに) 彼女がずっと記憶に留めてきたことは，森林に棲むゴリラたちが抱く海原への憧憬という野性的なロマンを，彼女が信じていることを意味する。しかも，「実際，なんのためにあるのかわかりゃしない」「愚かな人間の脚」(29) と比べて，ゴリラは一瞬のうちに彼女をオレンジの木の上に連れてよじ登る (18) 逞しくしなやかな脚を持っているのである。シャロウムにとってのゴリラは，自分をかき抱いてどこへでも連れて行ってくれ

る野性的英雄なのである。[フランシーヌ・パターソン，ユージン・リンデン（都守淳夫　訳）『ココ，お話しよう』（どうぶつ社，1984/85年），pp.33-34．原著はFrancine Patterson and Eugene Linden, *The Education of Koko* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1981).]

69）ジョン・M・シング『海に騎りゆく者たち　ほか—シング選集［戯曲編］』（恒文社，2002年），p.213．引用した『西の国の伊達男』は大場建治訳による。大場氏の注記にあるように，タイプ印書の最終稿ではこの「肌着一枚」は「すっ裸で」となっており，台詞を幾分手加減してもこのような騒ぎが起きたことを考えれば，「すっ裸で」なら，どれほどひどい事態になっていたことか，想像に難くない。

70）たとえばオケイシーの自伝を映画化したジャック・カーディフ監督作品（当初はジョン・フォード監督だったが病気で降板，それでもクレジットにはフォード作品とある）『若き日のキャシディ』（*Young Cassidy*, 1965）では，「旦那ったらベッドでガッカリさせないでよ」という娼婦の台詞に観客が野次を飛ばして反応している。

71）Margaret Kelleher and Philip O'Leary (eds.), *The Cambridge History of Irish Literature Volume 2 : 1890-2000* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), p.524.

72）Lyn Gardner, 'Death becomes her'.

73）21世紀思想研究会（編）『世界の宗教　101の謎』（河出書房新社，2005年），pp.13-14.

74）こうしたきょうだい間の生殖関係はテイアとヒュペリオン，ポイベとコイオス，テテュスとオケアノス，ケトとポルキュスの間で，また親子間の生殖はエキドナとオルトスの間で結ばれていることが系図から読みとれる。[西村賀子『ギリシア神話』（中公新書，2005年），pp.268-272.]

75）「ボニフェイス」の発音もある。「善を為す」意のラテン語'bonum facere'に由来するこの名前は，アイルランドの劇作家ファーカー（George Farquhar, 1678-1707）の『伊達男の計略』（*The Beaux' Stratagem*, 1707）に登場する，リチフィールド（Lichfield）にある宿屋の主人名であり，そこから普通名詞化して「（好人物で陽気な）宿屋（食堂，ナイトクラブ）の主人」（『リーダーズ英和辞典　第2版』）の意味で使われる。『エアリアル』のボニファスが＜好人物で陽気＞かどうかはちょっと疑問だが，高齢者だらけの修道院を一手に切り盛りしている点では「宿屋の主人」と呼べなくもないだろう。

あるいは彼が修道士であることを考えれば，スコット（Sir Walter Scott, 1771-1832）の『修道院』（*The Monastery*, 1820）『大修道院長』（*The Abbot*, 1820）に出てくるボニファス僧院長（Abbot Boniface）の連想が強いかも知れない。彼はスコットランド女王メアリーの退位・斬首後，ケナクヘア（Kennaquhair）修道院を出て，農民ブリンクフーリー（Blinkhoolie）として放浪する。

76）現在，アイルランドで一般的な車両（乗員8名以下，重量3.5トン以下で＜カテゴリーB＞と称される）の運転免許は17歳以上でなければならない（http://oasis.gov.ie/transport/motoring/categories_of_motor_vehicles_and minimum　2006/4/17取得）が，戯曲の第1幕は少なくとも10年以上前の設定であるから，その当時は16歳でも許されていたのかもしれない。2001年からは運転理論試験も課され，40問中35問正解が要求されるという（http://naokoguide.blog33.fc2.com/blog-entry-12.html　2006/4/17取得）。

77）ファーモイの夢に現れたアレキサンダー大王自身も夢に多大な関心を寄せ，戦地には夢占い師を連れて行った。難攻不落の古代フェニキア・チュロス（Tyr）の港町を攻撃中に，自分の楯の上で半人半神のサチュロス神（satyr）が踊る夢を見たとき，「サ」（汝のもの）＋「チュロス」という夢解きに感謝して総攻撃をかけ，陥落に見事成功したのだという。[東山紘久『プロカウンセラーの夢分析』（創元社，2002年），p.30.]

78）「スパルタでは，そうした［社会的弱者と呼べる］人々は丘の斜面に放っておかれたが，私が実権を握ったら，私もそうするだろう」（18）とファーモイは断言する。この点については，太田秀通『スパルタとアテネ』（岩波新書，1970年）の記述にあるように，スパルタ人は「子供が生まれると，部族員の集まる集会所で検査され，健康と体力に弱点のあるものはタイゲトス山麓の穴に落とされ」（p.87），「特徴的なことは，

スパルタ人・ペリオイコイ［参政権のない自由民］・ヘイロータイ［奴隷］は，大体において居住地を異にし，国家の身分制度が空間的にも分離した居住地にまで貫徹していた」(p.85) 史実と照応するだろう。

79) 空気の精エアリアルが登場するシェイクスピアの『テンペスト』では，ステファノー (Stephano) という大酒のみの給仕頭が登場する。奴隷キャリバン，道化師トリンキュローと酔いどれ3人組をなす彼は，エアリアルの操る，目に見えぬ糸によって沼地を通ってプロスペローのもとへと連れ出される。携帯電話の目に見えぬ電波でエアリアルを呼び出したのはステファニーの方かもしれないが，<エアリアル>にちなむ名前ではある。もうひとり，『ヴェニスの商人』にもポーシャの召使で，彼女のベルモント到着を伝える人物として，ステファノーがいる。

80) アレッシオ・パレンテ (甲斐睦興　訳)『ピオ神父と守護の天使』(フリープレス，2000/01年) の略歴と訳者あとがきによれば，南イタリア，ピエトレルチナ生まれ。5歳にしてアッシジの聖フランシスコに忠誠を誓う。15歳でカプチン修道会に入会し，ピオ修道士を名乗る。1918年，31歳のとき，キリストと同じ傷がピオ神父の身体に出現し，出血と激痛で苛まされ，81歳で逝去するまでこの聖痕は続いたという。教皇ヨハネ・パウロ2世は，1999年5月2日，バチカンの聖ペトロ大聖堂で神父の列福式を執り行った。

81)「ピオ神父は，1918年9月20日に聖痕を受けた。皮膚組織の裂傷は，外的な要因や病気からのものではなく，突然現れ，出血とするどい痛みを伴っている。傷は，円形に近い丸型で，傷口は輪郭がはっきりしていて，直径2センチを少し超えるくらいの大きさである。50年間，感染・腐敗・深化・浮腫・炎症が起こったことは一度もなく，同じところに変化なくありつづけ，癒える様子もなく，壊疽も起こさず，悪臭を放つこともなかった。それどころか数多くの証言から，花のような香りを放っていた。聖痕は，ピオ神父が亡くなる前日に消え，少しの傷跡もシミも残らなかった。」「ピオ神父は聖痕を受けた初の司祭であり(聖痕が現れた聖人の中で最も有名なアシジの聖フランシスコは，司祭ではなく助祭だった)，他の人とは比べられないほど長い50年もの間，聖痕が現れた。聖フランシスコは2年間聖痕が現れ，聖ジェンマ・ガルガーニは18ヶ月間聖痕が現れた。」［ファブリツィオ・コンテッサ (児島輝美　訳)『聖ピオ神父—受難の印を受けた司祭』(ドン・ボスコ社，2002年)，p.19.］;「私は自分の両手，両足，そして脇から血がしたたっていることに気づきました。私が体験した苦難，今もほぼ毎日体験している苦難がどんなものか想像できますか。脇の傷は，たえず出血しています……。」(1918年10月22日，ベネデット神父への手紙)，「両手，両足，そして心臓に，私はなんと鋭い痛みを感じていることか！」(同年11月24日，同)［パトリシア・トリース編 (児島輝美訳)『魂の酸素—ピオ神父のことば』(ドン・ボスコ社，2002年)，書簡番号65，67.］

82) テキスト冒頭のカーによる説明には，この「死と生」はグノーの『裁き主』(*Judex*) の一部分と記されている ('Mors et Vita' from Gounod' *Judex*)。しかし，筆者が入手したCD (*Lalo: Namouna* CD DCA878, Academy Sound And Vision, 1994) ジャケットでは，逆に「死と生」のなかに「裁き主」が収載されている表記になっている［JUDEX (*from* Mors et Vita)］。付録の解説文 (Noel Goodwin, 1993) によれば，この曲は1885年に英国バーミンガムで初演され，ローマ法王レオ13世に捧げられている。幕開きの「死」(Death) の部分は一種のレクイエムで，短い「裁き」(Judgment) によって，「生」(Life) の幻想的フィナーレへとつながれており，「裁き手」(*Judex*) はこのうちの一部分で，オーケストラのための荘厳で荘重に流れるテーマは，神を称える合唱の序曲でもあり伴奏でもある。「裁き手」はオーケストラの短い抜粋として残ってきたが，残りのオラトリオは大部分忘れられている，とのこと。筆者が聞いたのはこの5分足らずの「裁き手」(*Judex*) で，静かでゆったりとした川の流れを感じさせる曲調。カーがテキストに指定する「死と生」と同一でないかも知れないが，この曲には死を連想させるような悲愴感は漂っていない。

83) この名前は，青少年の麻薬汚染などアイルランドの社会問題を鋭く告発した，実在の新聞記者ヴェロニカ・ゲリン (Veronica Guerin, 1959-96) を強く意識した命名だろう。要所を衝いた質問をファーモイに矢継ぎ早に浴びせる姿は，映画『ヴェロニカ・ゲリン』(*Veronica Guerin*, 2003) に描かれた彼女の取材姿勢

を強く思い起こさせる。映画でヴェロニカを演じたのはケイト・ブランシェット（Cate Blanchett, 1969-）。映画プログラムは『ガーデンシネマ・イクスプレス第107号　ヴェロニカ・ゲリン』（ヘラルド・エンタープライズ，2004年）を参照。ヴェロニカの伝記については，エミリー・オライリー（佐治多嘉子・小林薫訳）『ヴェロニカ・ゲリン』（ソフトバンク　パブリッシング，2004年）が分かりやすい。

84）2003年刊行の事典によれば，「芸術文化省」は「芸術・スポーツ・観光省」（Arts, Sports and Tourism）に，「教育省」は「教育科学省」（Education and Science）に改称している。「財務省」はそのままの名称で存続。［*The Encyclopaedia of Ireland*, p.452.］

85）フィクションにモデル詮索は無意味だろうが，ここ四半世紀の歴代首相と任期を以下に記す。ホーヒー（1982/3/9－12/14），フィッツジェラルド（1982/12/14－1987/3/10），ホーヒー（1987/3/10－1992/2/11），レイノウルズ（1992/2/11－1994/12/15），ブルートン（1994/12/15－1997/6/26），アハーン（1997/6/26－　）。テキストの内容からすれば，首相にはならなかったものの，特異な神学理論で教育大臣を務めたファーモイのような閣僚がいたかどうかが，関心を惹くであろう。

あえてモデル詮索をすれば，大衆迎合を嫌うファーモイの性格は，「選挙民におもねることなく，強い個性と政治力で所信を実行に移し」たため，「決して心から敬愛されるといったタイプの政治家」でもなく，「あまり人に愛されるということがな」く，「蔵相としても有能な人物」だったホーヒーに酷似するだろう。しかしファーモイが蔵相を辞任して時の首相を交替させたことは，1991年にホーヒーを失脚させたレイノウルズ前蔵相の造反劇による政変を連想させる。また，ファーモイ・フィッツジェラルドという名前は，当然ホーヒーの後に首相を務めたギャレット・フィッツジェラルド（Garret Fitzgerald, 1926-）を想起させる。ファーモイ教育大臣が実娘殺人を犯したように，ホーヒー政権初期には殺人犯として起訴された法制局長官も存在した。こうした様々な政治的事件や要素をマリーナ・カーはたくみにファーモイの造型に取り込んでいると思われる。（引用は，波多野裕造『物語　アイルランドの歴史』（中公新書，1994/2004年），pp. 241-242.）

86）ユリは「葬式の際に死と再生のシンボルである花」で「大天使ガブリエルの象徴」でもある。［中央大学人文科学研究所（編）『ケルト　口承文化の水脈』（中央大学出版部，2006年），p.259.］

87）河川の'pike'は「カワカマス」，海洋の'barracuda'は「オニカマス」と，別の英単語を用いるのだが，巨大さから判断してエアリアルを襲撃しているのは「オニカマス」の可能性もある。日本産の「カマス」は全長30cm程度とされるが，「オニカマス」なら「体長は2mにも及び」「鋭い歯を持ち，時にはサメよりも危険」と恐れられているからである。［中村庸夫（つねお）『魚の名前』（東京書籍，2006年），p.61.］

88）道化ヨリックの頭蓋骨に語りかけるハムレットを強く想起させる場面である。

89）ダブリン，アビー劇場での初演を観たHarvey　O'Brienによる2002年10月5日の劇評。（http://www.culturevulture.net/Theater4/Ariel.htm　2006/3/11取得）

90）『英米文学辞典　第三版』（研究社，1985年），p.49.

91）石鍋真澄『ピエロ・デッラ・フランチェスカ』（平凡社，2005年），p.202.

92）アレッサンドロ・アンジェリーニ（池上公平　訳）『ピエロ・デッラ・フランチェスカ』（東京書籍，1993年），p.50.

93）マリリン・アロンバーグ・レーヴィン（諸川春樹　訳）『岩波　世界の美術　ピエロ・デッラ・フランチェスカ』（岩波書店，2004年），p.241.

94）Harvey O'Brienによる2002年10月5日の劇評。

95）在任中にホーヒー首相は有力な財界人たちから800万ポンド（約16億円）以上の献金を受けていたことが裁判で立証されている。また財務大臣時代の1970年5月には，兵器の非合法輸入を画策したとされる＜武器危機＞（Arms Crisis）に関与した疑惑でリンチ首相から罷免され，逮捕されたが，のちに無罪評決を得て

いる。(*The Encyclopaedia of Ireland*, p.46, pp.477-478.) さらに「数人のジャーナリストの電話が政府機関によって盗聴され」「この盗聴がホーヒーじきじきの指示によって行なわれたとの疑い」が持たれたこともある。(波多野裕造『物語　アイルランドの歴史』, p.243.)

96) ロンドン共同電によると，ホーヒーは2006年6月13日，ダブリン郊外の自宅で死去。死因は明らかではないが，長く癌や心臓病を患っていたという。(『山陽新聞』, 2006年6月14日，p.5.)

97) http://www.irishplayography.com/search/play.asp?play_id=912　2006/5/19取得

98) 上記サイトの他に，Cathy Leeney and Anna McMullan (eds.), *The Theatre of Marina Carr: 'before rules was made'* (Dublin; Carysfort Press, 2003), p.xxiにもこの記述がある。

99) ダブリン，ピーコック劇場での初演を観たHarvey O'Brienによる2003年1月26日の劇評。(http://www.culturevulture.net/Theater4/SonsandDaughters.htm　2006/3/11取得)

100) 'Interview with Marina Carr', p.147.

101) 村上春樹（編訳）『バースデイ・ストーリーズ』(中央公論新社，2002年)，p.238.

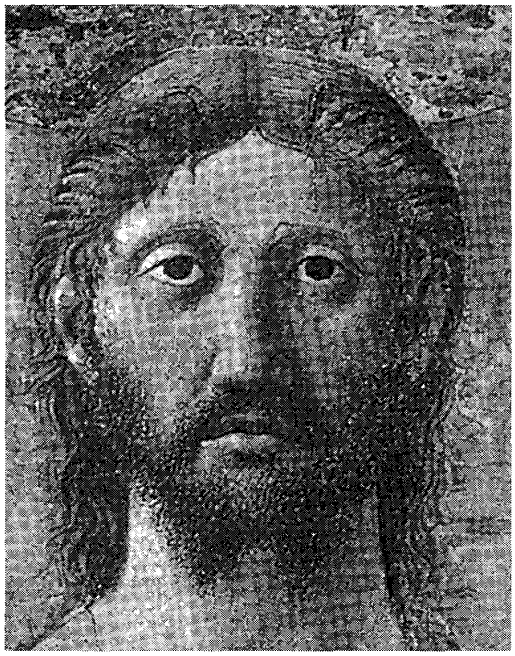
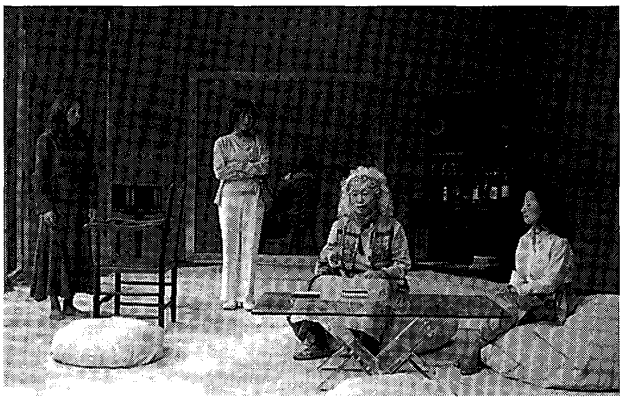


図　「キリストの復活」(部分)（キリストの顔）
[本文p.119.]

撮影・高岩　震（2005年10月９日，ブレヒトの芝居小屋）



写真Ａ　左から長畑　豊（ロバート），原口久美子（マイ）［本文p.88.］

写真Ｂ　左から折林　悠(ミリー)，風吹可奈（コニー），長畑　豊（ロバート），志賀澤子（フレクローン），原口久美子（マイ）［本文p.89.］

写真Ｃ　左から奈須弘子(ベック)，志賀澤子(フレクローン)，原口久美子（マイ），冨山小枝（アグネス），三由寛子（ジュリー）［本文p.90.］

写真Ｄ　左から奈須弘子(ベック)，原口久美子（マイ），長畑　豊（ロバート），志賀澤子（フレクローン），折林　悠（ミリー）［本文p.93.］